館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第34集

加法師遺跡

（かぼうしいせき）

KABOUSI

1999

館林市教育委員会

加 法 師 遺 跡

K A B O U S I

1 9 9 9

館 林 市 教 育 委 員 会

写真(1)　加法師遺跡　調査区全景

写真(2)　加法師遺跡　2号住居址遺物出土状態

写真(3)　加法師遺跡　2号住居址遺物出土状態

序

加法師遺跡は館林市街地の北部の台地上に位置します。

現在、本市には144か所の埋蔵文化財包蔵地があり、毎年、開発に伴う事前の発掘調査が行われておりますが、加法師遺跡の発掘調査もその一部が平成8年に実施されました。

その際の調査で、遺跡の一部から縄文時代中期の住居址が5軒確認され、その住居址の中から、大量の縄文土器が出土しました。これまで、本市で縄文時代の住居や土器が発見された遺跡には、大袋遺跡や間堀遺跡などがありますが、加法師遺跡はそれに次ぐ縄文時代の代表的な遺跡といえましょう。

特に、足の踏み場もないくらいに土器が出土した住居址もあり、その量に目を見張るばかりか、一軒の住居の中から関東地方やその周辺の各地で作られたような模様の特徴を持つ様々な縄文土器も出土し、縄文時代の人たちの文化交流が私たちの想像をはるかに越えて盛んに行われたことがうかがわれます。

ここに、ようやく調査報告書としてまとめることができましたが、本報告書が私たち館林市の歴史を知る基礎資料として、また地域文化の再発見に役立てていただけることを願うとともに、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご指導、ご協力をいただきました多くの皆様に感謝申しあげ、序といたします。

平成11年3月31日

館林市教育委員会
教育長　大　塚　文　男

例　　言

1. 本報告書は、平成8年度に墓地開発に伴って発掘調査を実施した加法師遺跡の一部の調査結果をまとめたものである。
2. 発掘調査地の該当地番は館林市加法師町2174番地の1である。
3. 調査ならびに遺物整理作業は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。（調査・遺物整理年度　平成8～10年度）

教　育　長　　高瀬利一（平成10年3月まで）　大塚文男（平成10年4月より）
教育次長　　関口久男（平成10年3月まで）　笠原　進（平成10年4月より）
主　管　課　　文化振興課
文化振興課長　　田沼俊彦（平成9年3月まで）　今井　敏（平成9年4月より）
文化財係長　　石井正和
主　　査　　新井直次
学　芸　員　　岡屋英治　岡屋紀子（担当）　黒澤文隆　阿部弥生　原　幸恵
調査補助員　　寺内景子
発掘参加者　　石井悦雄　石川栄吉　川島範子　小林浩子　坂田岩吉
遺物整理、実測図・報告書作成
寺内景子　長棟紀子　根岸良子　荻野貴子　川島範子　岸　貴子　小林浩子

4. 報告書の編集ならびに執筆、写真撮影は岡屋紀子が担当した。
5. 発掘調査に係る図面・写真等の記録類、出土遺物、および関係書類等は館林市教育委員会で保管している。
6. 出土土器のうち12点（2号住居址№1～9、4号住居址№1～3）の実測図の作成は㈱シン技術コンサルに委託した。
7. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々、諸機関にご指導・ご協力をいただきました。ここに深く感謝申しあげます。（敬称略）

教王院　唐澤至朗　小菅将夫　群馬県教育委員会　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

凡　　例

1. 挿図に、建設省国土地理院発行の1／5万地形図（古河）、ならびに館林市役所都市計画課発行の1／2500都市計画図を使用した。
2. 本書における遺構番号は、発掘調査時に付したものを使用した。
3. 本書で使用した遺物番号は遺構ならびに項目別に整理し、新たに付したものである。
4. 本書で使用した図版のうち、遺構とおもな遺物の縮尺はほぼ次のとおりである。

遺構 … 1／60
遺物 … 土器類〈1／4または1／3〉　石器類〈1／2または1／3〉

〈 目　　次 〉

口　　絵
序
例　　言
凡　　例

第 Ⅰ 章　加法師遺跡の立地と環境 …… 1
　1．立地
　2．周辺の遺跡
第 Ⅱ 章　調 査 の 概 要 …… 4
　1．調査に至る経緯
　2．調査方法と経過
　3．遺構と遺物の概要
第 Ⅲ 章　検出された遺構と遺物 …… 7
　1．住居址
　2．土坑
　3．遺構外出土遺物
　4．その他の遺物
第 Ⅳ 章　ま と め …… 41

参 考 文 献
写　　真
報告書抄録

〈 図 版 目 次 〉

第1図　館林の地形と加法師遺跡位置図 …… 1
第2図　周辺の遺跡分布図 …… 3
第3図　加法師遺跡全体図 …… 4
第4図　調査区内トレンチ配置図 …… 5
第5図　遺構配置図 …… 6
第6図　1号住居址平面図および断面図 …… 7
第7図　1号住居址出土遺物(1) …… 9
第8図　1号住居址出土遺物(2) …… 10
第9図　1号住居址出土遺物(3) …… 11
第10図　2号住居址平面図および断面図 …… 12
第11図　2号住居址遺物出土状態図 …… 13
第12図　2号住居址出土遺物(1) …… 17
第13図　2号住居址出土遺物(2) …… 18
第14図　2号住居址出土遺物(3) …… 19
第15図　2号住居址出土遺物(4) …… 20
第16図　2号住居址出土遺物(5) …… 21
第17図　2号住居址出土遺物(6) …… 22
第18図　3号住居址平面図および断面図 …… 23

第19図　3号住居址出土遺物(1) …… 25
第20図　3号住居址出土遺物(2) …… 26
第21図　4号住居址平面図および断面図 …… 27
第22図　4号住居址出土遺物(1) …… 30
第23図　4号住居址出土遺物(2) …… 31
第24図　4号住居址出土遺物(3) …… 32
第25図　4号住居址出土遺物(4) …… 33
第26図　5号住居址平面図 …… 34
第27図　5号住居址出土遺物 …… 35
第28図　1号土坑遺構図
ならびに2号土坑出土遺物 …… 36
第29図　遺構外出土遺物(1) …… 38
第30図　遺構外出土遺物(2) …… 39
第31図　その他の遺物 …… 40

〈 写 真 目 次 〉

写真(1)　加法師遺跡　調査区全景 …… 口絵
写真(2)　加法師遺跡　2号住居址遺物出土状態 …… 口絵
写真(3)　加法師遺跡　2号住居址遺物出土状態 …… 口絵

写真1　加法師遺跡調査区全景 …… 43
写真2　確認調査風景 …… 43
写真3　1トレンチ遺物出土状態（1号住居址）…… 43
写真4　1トレンチ遺物出土状態（3号住居址）…… 43
写真5　2トレンチ遺物出土状態（2号住居址）…… 43
写真6　1号住居址遺構確認 …… 44
写真7　1号住居址土層断面（1トレンチ）…… 44
写真8　1号住居址遺物出土状態 …… 44
写真9　1号住居址遺物出土状態（埋甕炉）…… 44
写真10　1号住居址埋甕炉埋設状態 …… 44
写真11　1号住居址完掘状態 …… 44
写真12　2号住居址遺構確認 …… 45
写真13　2号住居址土層断面 …… 45
写真14　2号住居址遺物出土状態(1) …… 45
写真15　2号住居址遺物出土状態(2) …… 45
写真16　2号住居址遺物出土状態(3) …… 45
写真17　2号住居址遺物出土状態(4) …… 45
写真18　2号住居址遺物出土状態(5) …… 46
写真19　2号住居址完掘状態 …… 46
写真20　3号住居址遺構確認 …… 46
写真21　3号住居址土層断面 …… 46
写真22　3号住居址遺物出土状態(1) …… 46
写真23　3号住居址遺物出土状態(2) …… 46
写真24　3号住居址遺物出土状態(3) …… 47
写真25　3号住居址完掘状態 …… 47
写真26　4号住居址遺構確認 …… 47
写真27　4号住居址土層断面 …… 47
写真28　4号住居址遺物出土状態(1) …… 47
写真29　4号住居址遺物出土状態(2) …… 47
写真30　4号住居址遺物出土状態(3) …… 48
写真31　4号住居址遺物出土状態(4) …… 48
写真32　4号住居址遺物出土状態(5) …… 48
写真33　4号住居址完掘状態 …… 48
写真34　2号土坑遺物出土状態 …… 48
写真35　住居址完掘状態全景 …… 48
写真36～43　1号住居址出土遺物 …… 49
写真44～68　2号住居址出土遺物 …… 50
写真69～77　3号住居址出土遺物 …… 54
写真78～96　4号住居址出土遺物 …… 55
写真97～101　5号住居址出土遺物 …… 58
写真102・103　2号土坑出土遺物 …… 59
写真104～108　遺構外出土遺物 …… 59
写真109～113　その他の遺物 …… 60
写真114～117　調査風景(1)～(4) …… 60

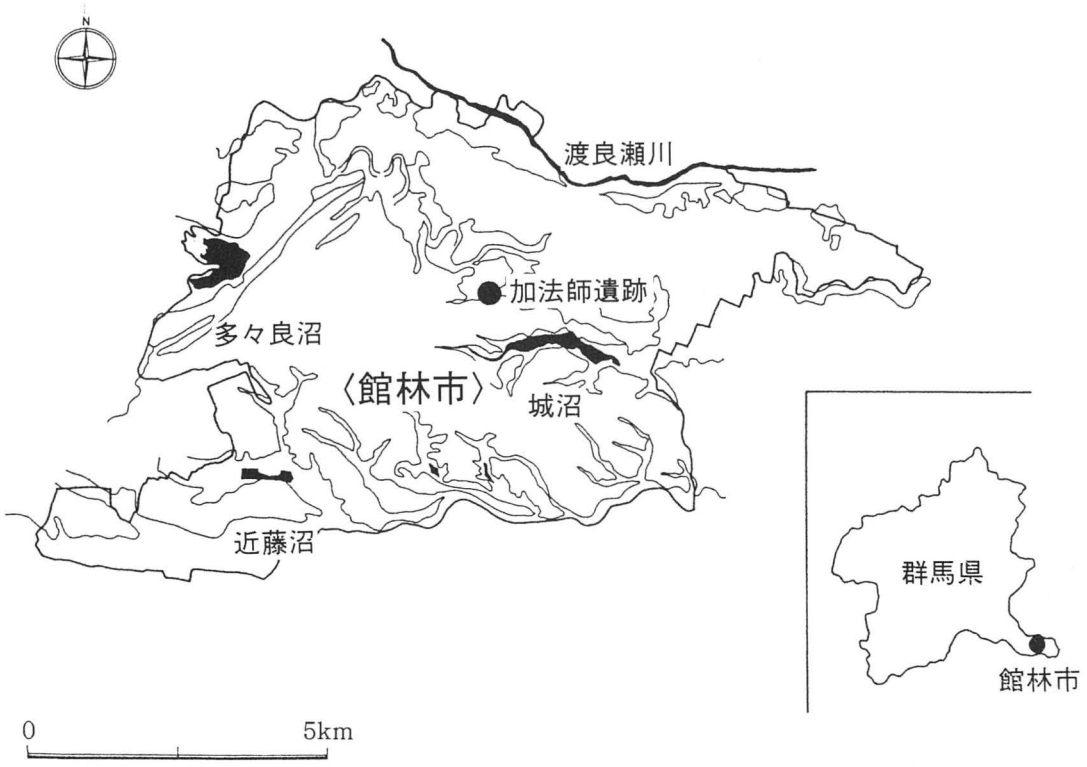
第Ⅰ章　加法師遺跡の立地と環境

1. 立　地

館林市は、群馬県の南東部、関東平野の北辺に位置し、北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、南は邑楽郡明和町を越え利根川を境に埼玉県に接している。市内のほぼ中央部には標高20m前後の邑楽・館林台地と呼ばれる洪積台地が東西に延び、この洪積台地を取り囲むように、利根・渡良瀬川に連なる大小河川の氾濫原である沖積地（低地）が広がっている。

加法師遺跡は、市内のほぼ中心にある館林市役所の北約400mに位置する。所在地は館林市加法師町地内にあり、名称は町名を付して命名された。遺跡は、邑楽・館林台地の北東縁にあたり、北は渡良瀬川に連なる沖積低地が広がる。遺跡付近の標高は約19mで、低地との標高差は約1mである。また、本遺跡を含む市街地一帯は、中世末から近世にかけて館林城として整備された地域で、加法師遺跡付近は館林城の北東部に位置する。本遺跡の中にも土塁と堀が巡らされ（一部、平成7年度開発）、遺跡一帯も郭の内部であることがわかる。江戸時代の絵図面等には、この一帯を「中間町」と記しているものもあるが、通称「加法師郭」とも呼ばれている。

散布する遺物は縄文時代のものが中心で、平成7年度に調査を実施した館林城跡の土塁の土層内からも多くの縄文土器片が出土した。



第1図　館林の地形と加法師遺跡位置図

2. 周辺の遺跡

館林市内における遺跡数は、昭和58年から63年にかけて実施した市内遺跡詳細分布調査（『館林市の遺跡』）によると、推定地を含めて144か所あり、その多くは低い台地上に分布している。その内訳は、遺物散布地として、旧石器時代3、縄文時代13（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代0、古墳時代から平安時代96（うち縄文時代の遺物散布が見られるもの23）があり、その他では古墳17基（推定を含み延べ25基）、中世生産址1、中世城館址12（伝承地を含む）、近世城館址2となっている。平成9年度までの調査で、市内の15か所の遺跡で住居跡が確認されている。

加法師遺跡(1)は、邑楽・館林台地の北東縁にあたり、渡良瀬川の氾濫原である沖積低地に突出する台地上に立地し、周辺には同様の立地上に縄文時代から近世までの遺跡が分布している。

このうち、加法師遺跡と同じ台地上には、城町遺跡(2)、尾曳町1遺跡(3)、外加法師遺跡(4)〈破壊〉などの遺跡が見られる。外加法師遺跡は、伴木堀幹線排水路を隔て、加法師遺跡のすぐ東に隣接する遺跡で、縄文時代の遺物を散布する遺跡であったが、学校建設のためにすでに破壊されている。さらにその東には尾曳町1遺跡があり、昭和59年の調査では古墳時代前期の住居跡2軒などが確認でき、甑、甕、台付甕などが出土している。また、加法師遺跡の南西部には城町遺跡があり、奈良・平安時代の遺物の散布が見られる。

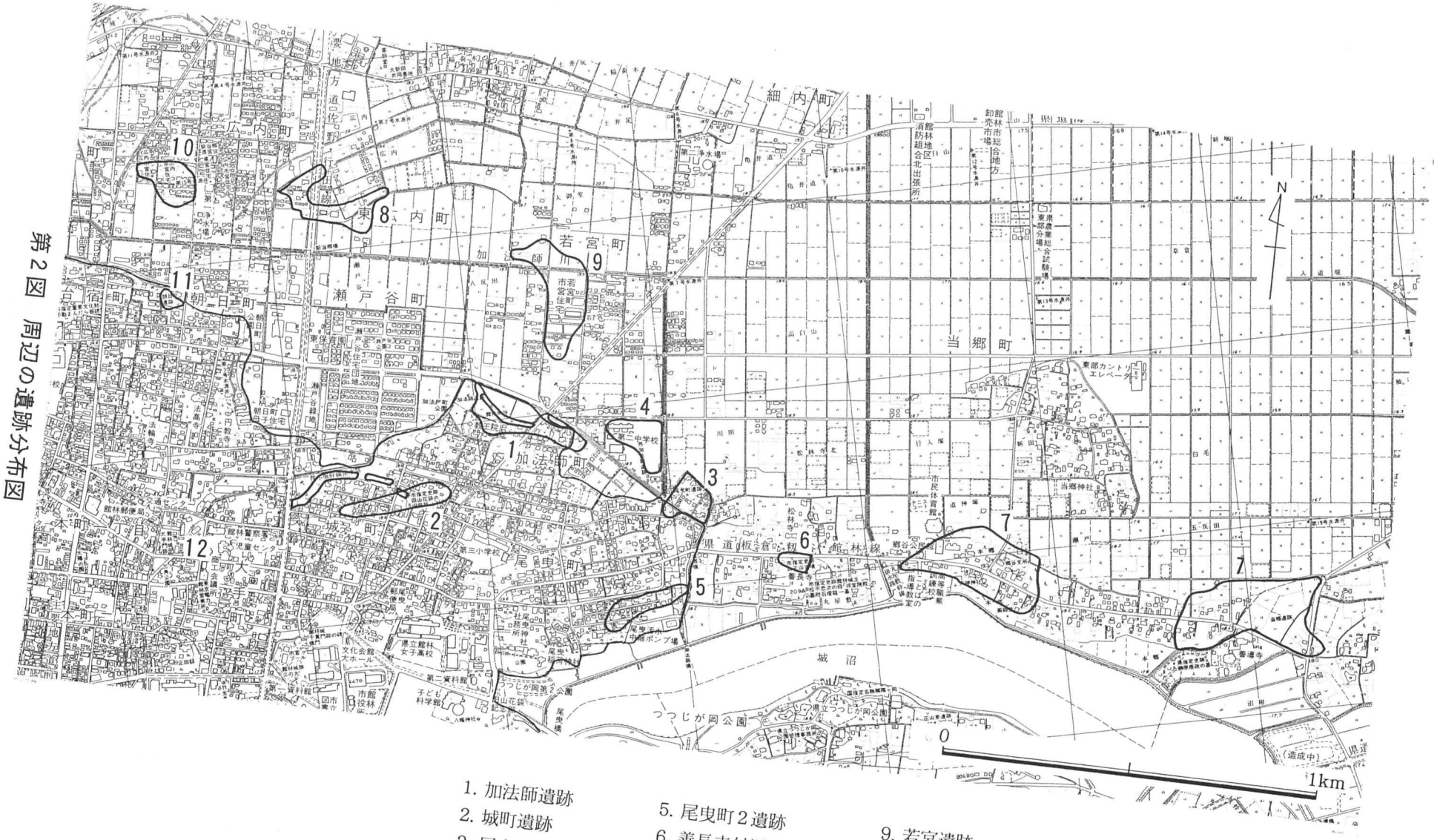
さらに、邑楽・館林台地の東端部に続く台地上には、尾曳町2遺跡(5)、善長寺付近遺跡(6)、当郷本郷遺跡(7)などの遺跡が見られ、これらの遺跡はすぐ南には城沼が隣接している。このうち、尾曳町2遺跡は古墳時代以降の遺物を散布し、また、善長寺付近遺跡は古墳時代の遺物が散布する他、古墳が1基（市指定史跡山王山古墳）現存する。この古墳の周辺にはかつて2基の古墳も存在し、古墳群を形成していたことがうかがわれる。山王山古墳は昭和59年度の整備工事に伴い、墳丘の測量と周濠の調査を実施し、その結果、出土した埴輪などから6世紀後半の古墳であることが明らかになった。また、当郷本郷遺跡は平成7年度に一部調査を実施し、その結果、中・近世の遺物を伴う溝の一部や井戸址が確認できた。

加法師遺跡の北に広がる沖積低地に形成された自然堤防などの微高地上には、広内町2遺跡(8)、若宮遺跡(9)などの遺跡があり、平安時代の遺物を散布する。

さらに、西側の台地上には平安時代以降の遺物が散布する広内町1遺跡(10)、縄文時代の遺物が散布する朝日町遺跡(11)などがある。

また、加法師遺跡を含む周辺の遺跡の特徴として、中世から近世にかけて整備された館林城跡(12)の一部であったことがあげられる。特に加法師遺跡内には館林城跡の土塁と堀の一部が残され、平成7年度には約100mに渡って残されていた土塁の調査を行った。その結果、幅11～17m、高さ1.7～2.1mの土塁で、ロームブロックが混在する暗褐色土と黄褐色土を交互に積み上げていく版築構造で築かれていたことが明らかになった。土塁の北側には堀も巡らされ、幅約5m、深さ約1mの堀であったことが確認できた。なお、土塁の土層中から、大量の縄文土器片も出土し、土塁を構築する際に前時代の遺跡の土の一部を使用したことがうかがわれる。

加法師遺跡付近の館林城の土塁は、その東側と西側にも台地の縁辺に沿って一部が現存しているが、近年の市街地開発が進む中、今後の保存についての対策を考慮していく必要がある。



1. 加法師遺跡
2. 城町遺跡
3. 尾曳町１遺跡
4. 外加法師遺跡
5. 尾曳町２遺跡
6. 善長寺付近遺跡
7. 当郷本郷遺跡
8. 広内町２遺跡
9. 若宮遺跡
10. 広内町２遺跡
11. 朝日町遺跡
12. 館林城跡

第２図　周辺の遺跡分布図

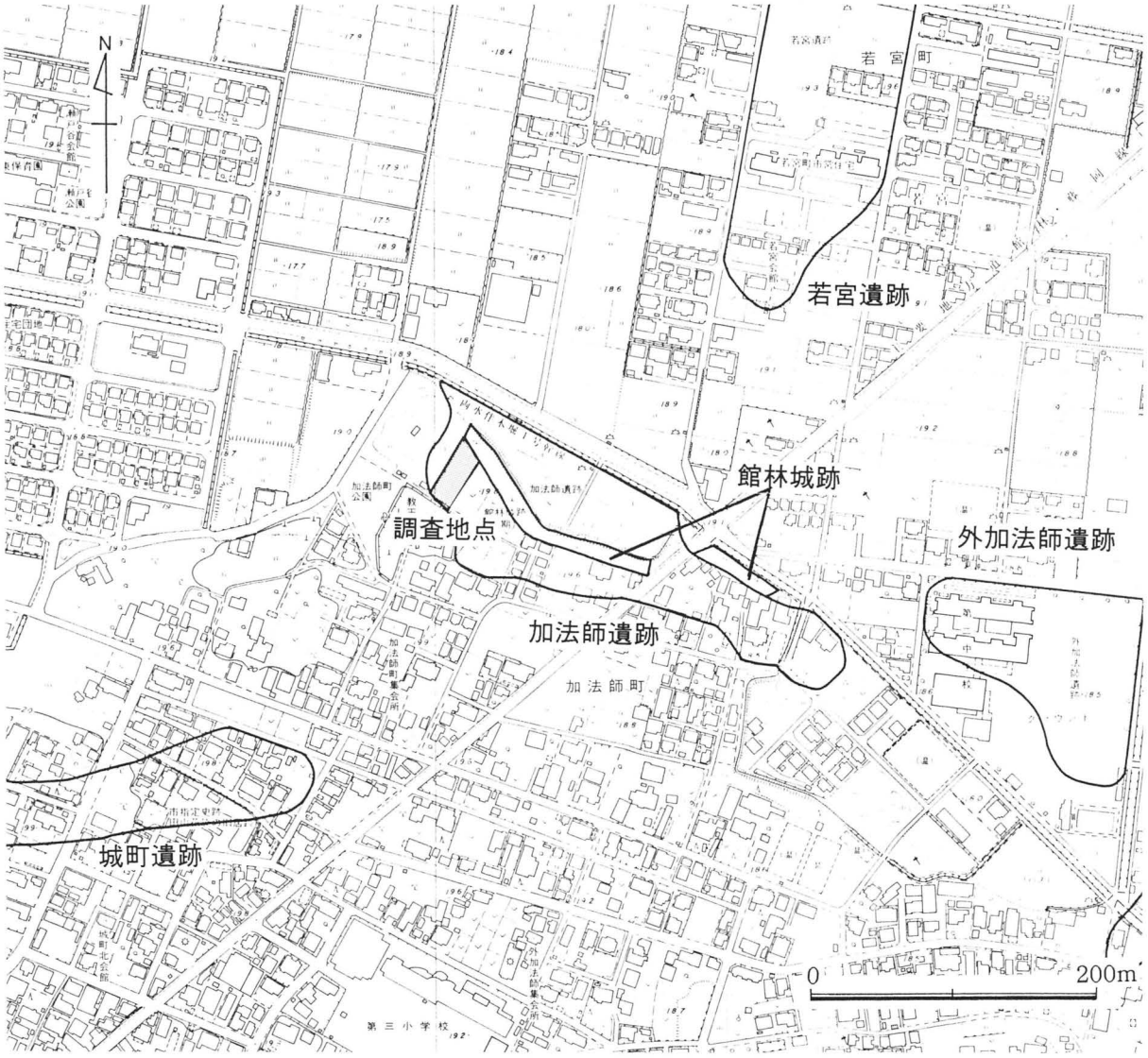
第Ⅱ章　調査の概要

1．調査に至る経緯

加法師遺跡の発掘調査は、宗教法人教王院の加法師町2174－1の土地における墓地開発に伴う事前調査として実施した。館林市教育委員会は、教王院が市農業委員会に提出した寺院北側の農地の転用の届出に基づき、協議を開始した。同地は埋蔵文化財の調査が必要な土地であることから、協議を重ね事前調査を実施した。

2．調査方法と経過

調査地は南北に細長い形であるため、調査は南北方向にトレンチを3本設定し、東から1・2・3トレンチとし、土木重機により耕作土を取り除いた。この結果、トレンチ南部分では地表から約30cm、トレンチ北部分では地表から約60cmの深さでローム面があらわれ、精査したところ、1トレンチと2トレンチから黒褐色土および暗褐色土の掘り込みが数か所確認された。



第3図　加法師遺跡全体図

さらに、それら掘り込み部分の覆土を掘り下げたところ、縄文時代中期（加曽利E式、阿玉台式等）の一括土器が多数出土し、土層に変化が見られることから、逐次拡張を行い遺構確認を行った。その結果、縄文時代中期の住居址５軒（うち１軒は未調査の部分があり）と土坑２基が検出された。

住居址と土坑が確認された区域は、調査地の中央から東部分に集中し、遺構は南北に並ぶように検出された。また、調査地の西側の土地は、かつて蓮田として利用されていた土地であり、地形的に低地にあたり、調査区は西側に低地を望む台地上にあたることがわかり、縄文時代の集落址の範囲は、本調査地から東へとさらに広がることも推定できる。

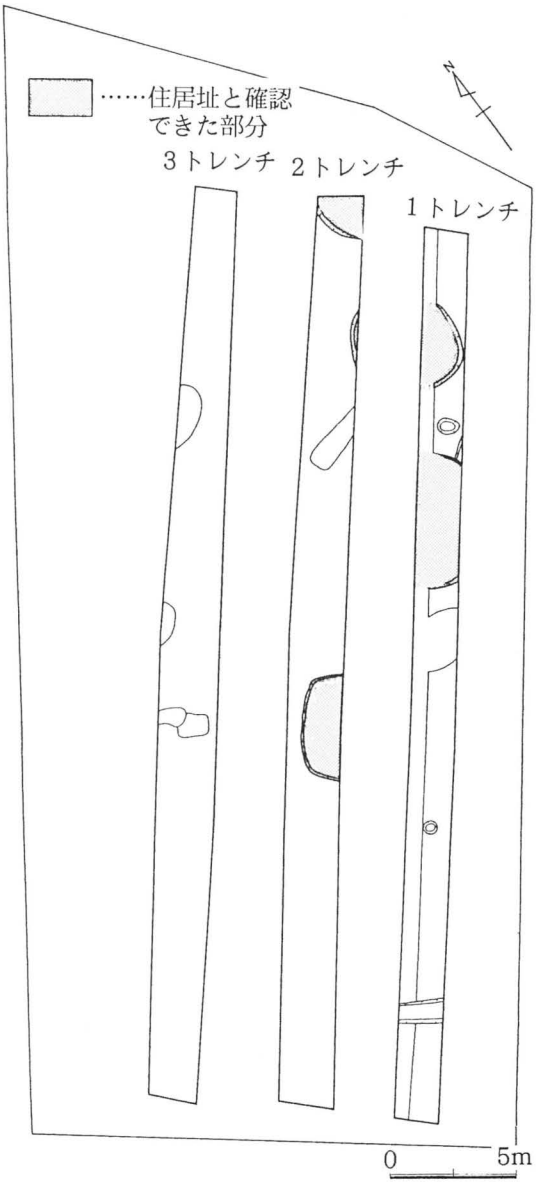
調査区は、畑地として使用されていた土地で、土層は、南面では地表から約30cmが耕作土でその下からローム層が確認され、北面では地表から約60cmと耕作土がやや深くなり、その下からローム層が確認された。耕作土が深かったことから、比較的遺構の保存状態も良好であった。

３．遺構と遺物の概要

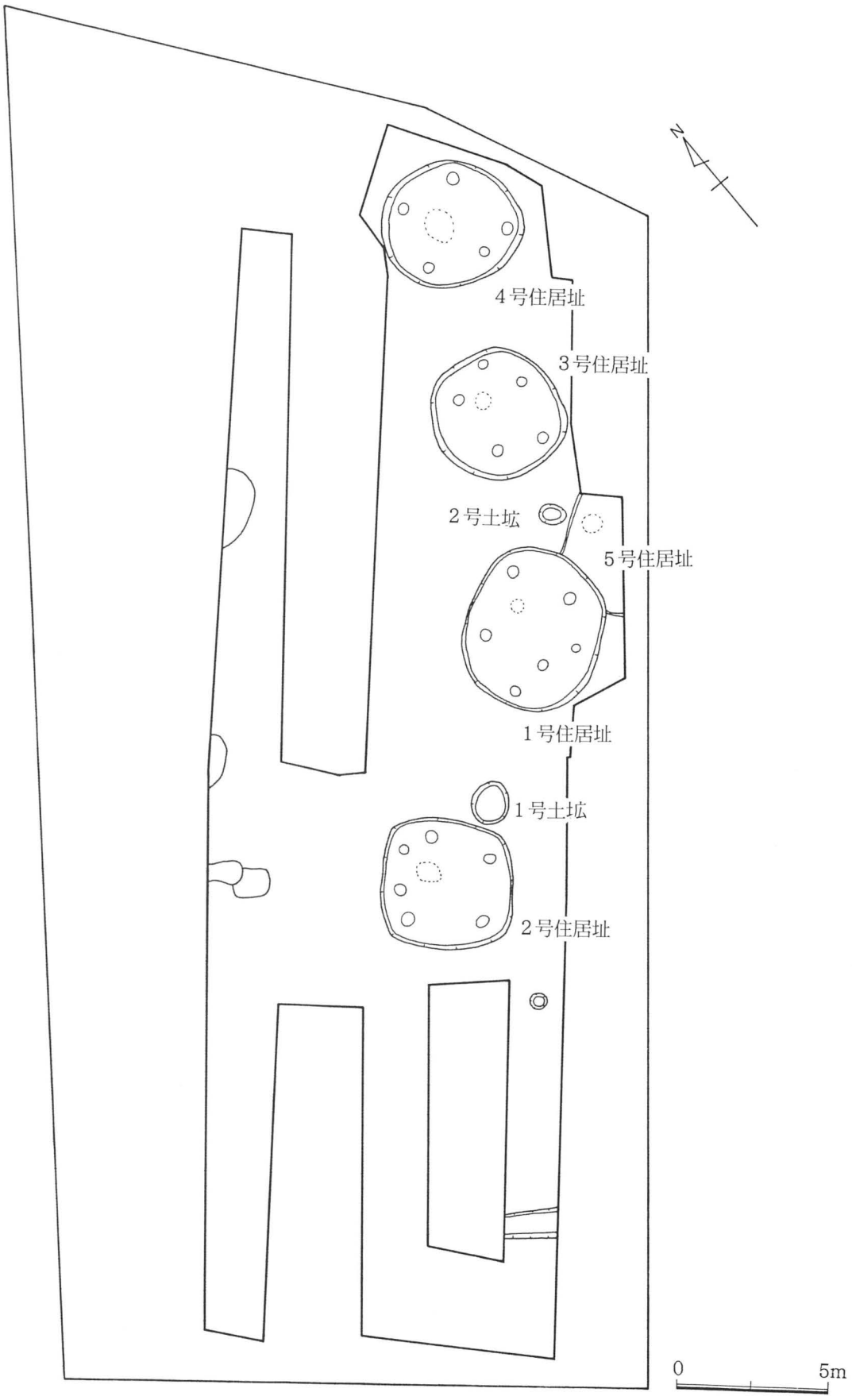
調査地から検出できた遺構は、縄文時代中期の住居址5軒と土拡2基である。このうち、住居址は北から4号住居址、3号住居址、1号住居址、2号住居址と並び、1号住居址と重複して5号住居址の一部も検出されたが、東半分が調査区外であったため、未調査のままである。

各住居址からは炉の跡も検出され、特に1号住居址は埋甕炉の形態をとっていた。

出土遺物は多く、特に2号住居址と4号住居址からは、縄文土器の一括個体や破片が大量に出土した。中でも、2号住居址からは高さ20～30cmほどの深鉢の一括個体が12個体、遺物番号を付した遺物が240点出土し、これらの土器の特徴をみると、関東地方やその周辺で作られた特徴を持つ様々な土器であることがわかる。そのほか、土製円板や石器類も多数出土した。



第４図　調査区内トレンチ配置図



第5図　遺構配置図

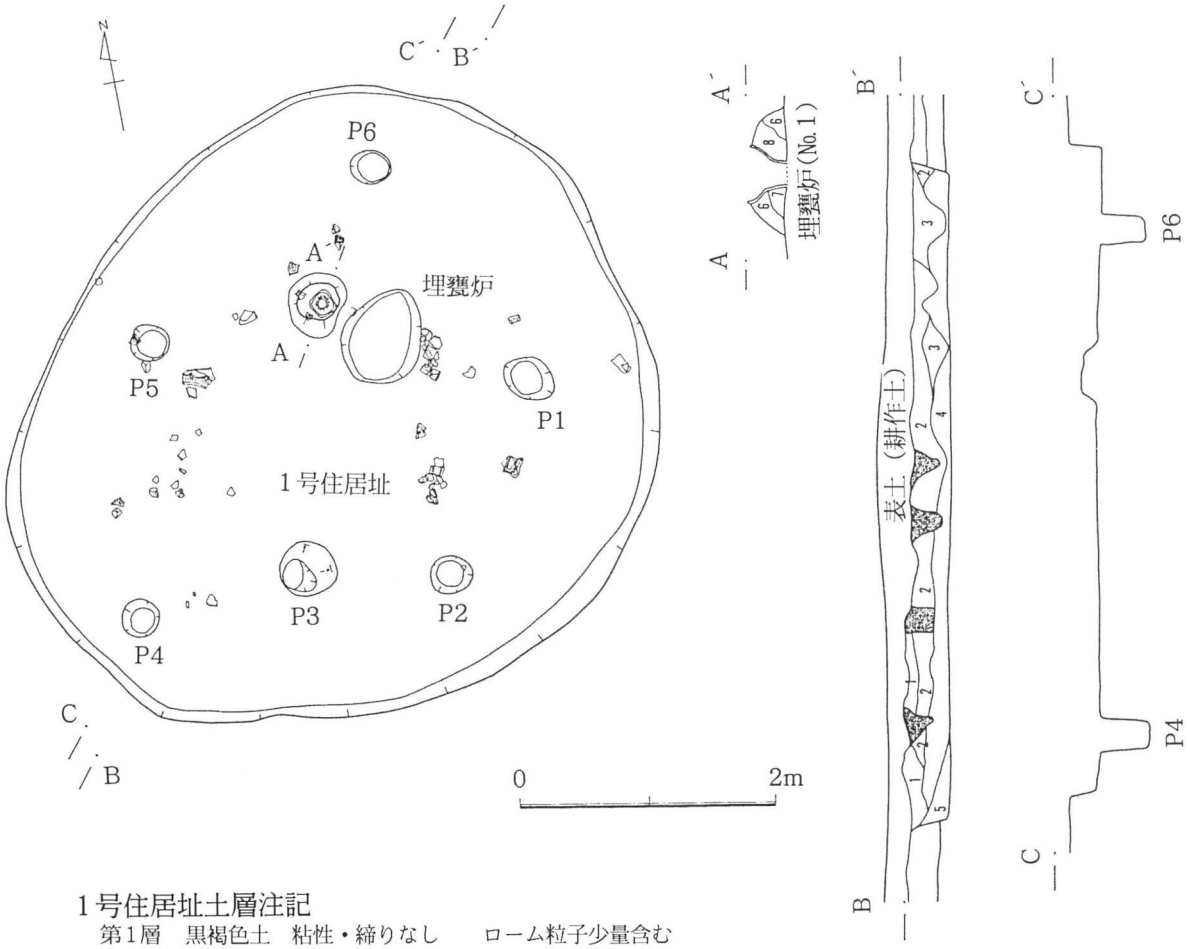
第Ⅲ章　検出された遺構と遺物

1．住　居　址

1 号 住 居 址（第６図）

調査区の東側はほぼ中央部より検出され、5号住居址と重複する。約5.4×4.7mの楕円形をした住居で、長軸の方位は北東40°である。壁高は約17～27cmを残す。住居の中央部やや北寄りに埋甕炉と長径約80cm、深さ25cmの楕円形状の掘り込みを検出した。埋甕炉は床面に高さ約30cmの土器（1号住№1）が据えられ、その回りには赤色の焼土の痕跡が認められた。

柱穴と思われるピット状の掘り込みは6本で、住居の壁際に沿って並んで検出された。ピットの深さは34～37cmである。



1号住居址土層注記

第1層	黒褐色土	粘性・締りなし	ローム粒子少量含む
第2層	暗褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子多量に含む
第3層	明褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子・ロームブロック多量に含む 焼土粒子・焼土ブロック多量に含む
第4層	明褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子・ロームブロック多量に含む
第5層	黄褐色土	粘性・締りあり	ロームブロック多量に含む
第6層	黄褐色土	粘性・締りあり	ロームブロック、焼土・カーボン粒子多量に含む（埋甕炉）
第7層	赤 色 土		焼土ブロック（　〃　）
第8層	黒褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子・焼土粒子少量含む（　〃　） カーボン粒子多量に含む

第６図　１号住居址平面図および断面図

1号住居址出土遺物（第7～9図）

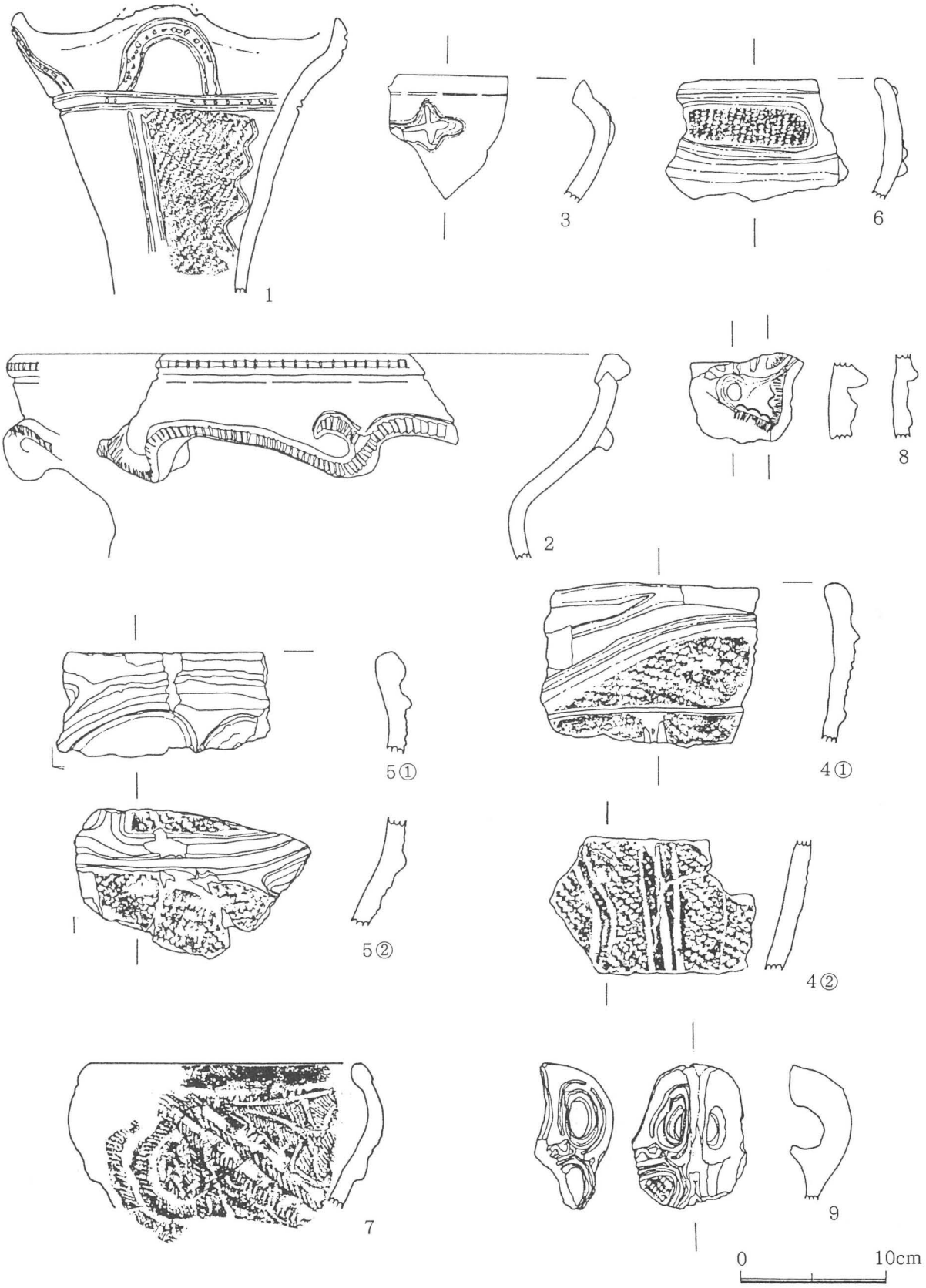
出土した遺物は、縄文時代中期の土器や石器等が中心で、実測可能なものは土器が10点、土製円板が1点、石器が20点であった。

そのうち、完形で出土した土器は、埋甕炉で使用していた深鉢（1）の1点で、その他は深鉢の口縁部（2～7）6点と口縁部の装飾（8～10）3点であった。また、土製円板（11）は1点出土し、直径2.2cmで、表面に縄文が施されている。（土器と土製円板の詳細は表1を参照）

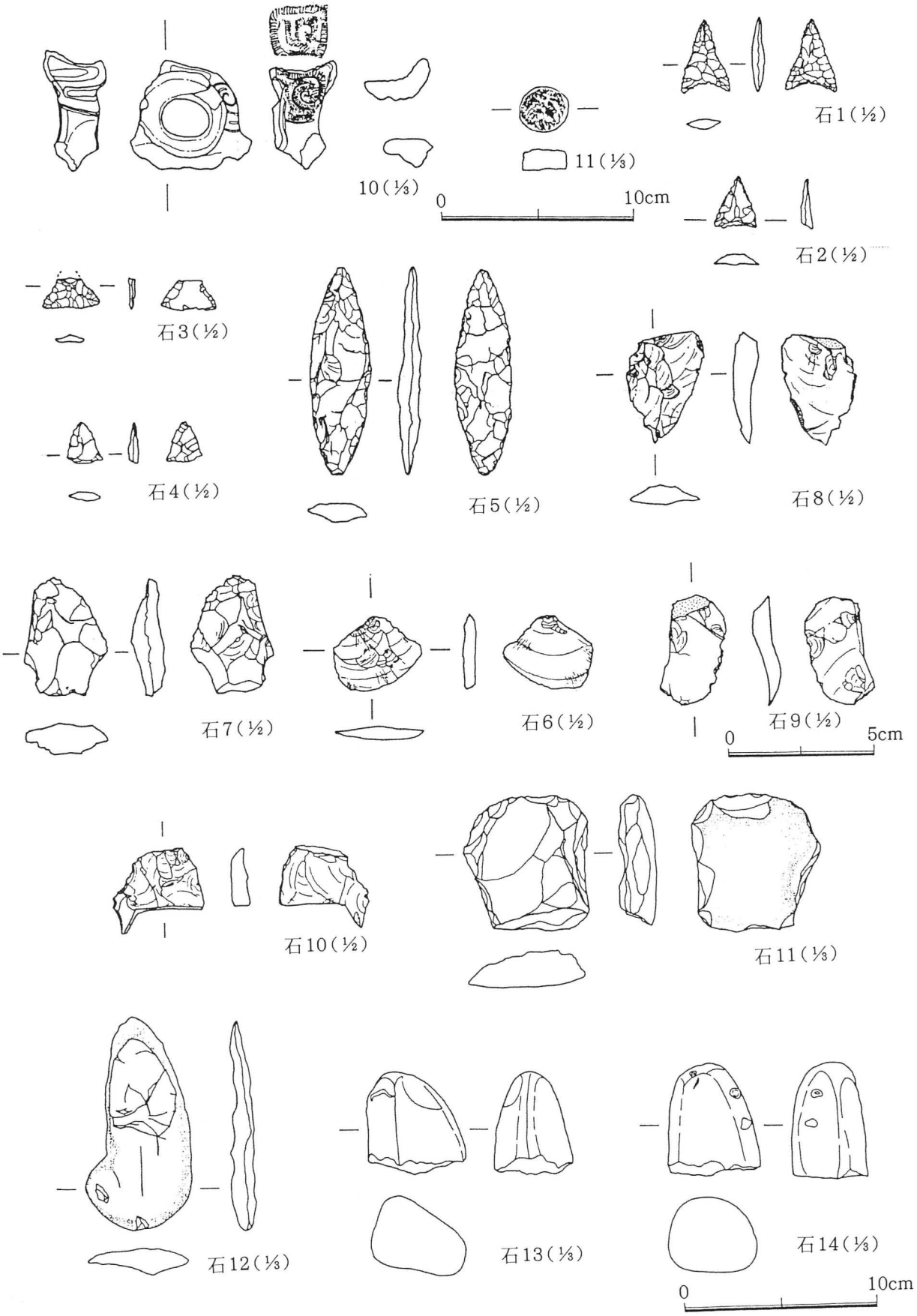
石器の内容は、石鏃が4点、ポイントが1点、フレークが5点、石斧が2点、磨石が2点、敲石など使用痕が認められた石器が5点、石皿が1点であった。石鏃（1～4）の石材はチャート、ポイント（5）の石材は砂岩質、フレーク（6～10）の石材は6が黒曜石で、その他はチャートである。また、石斧（11・12）の石材は11が砂岩質、12が粘板岩質である。磨石（13・14）の石材は安山岩質である。敲石などの使用痕のある石器（15～19）の石材は15・19が砂岩質、16・18が安山岩質、17が凝灰岩質である。石皿（20）の石材は安山岩質である。

〈表1〉　1号住居址出土遺物観察表（土器類）

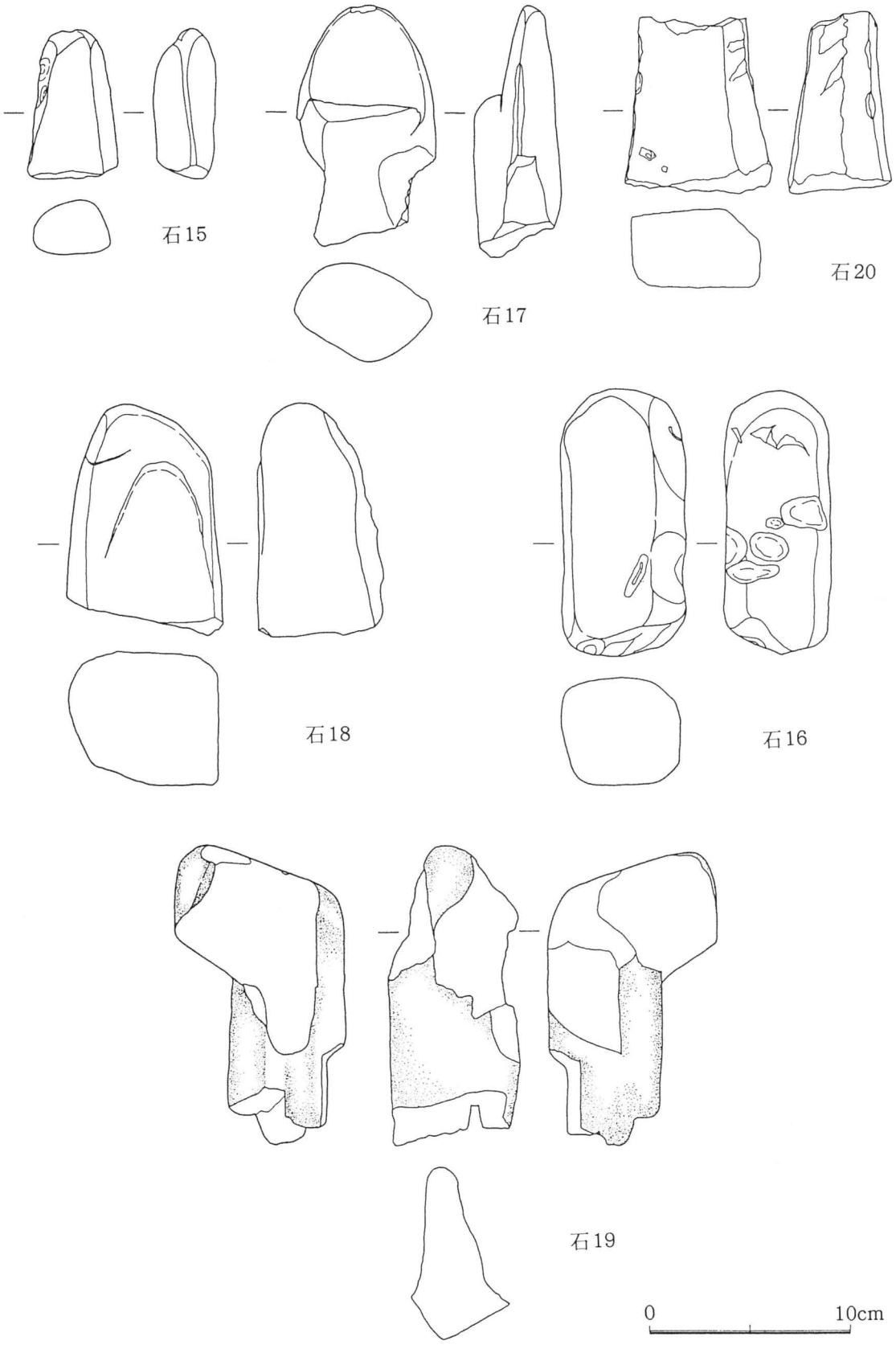
番号	器　種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴、備考
1	深鉢	口径（22.5） 器高（19.3）	底部欠損	①淡赤褐色　②良好 ③粗砂粒	口縁部は2本の平行沈線の中に半裁竹管文を施す。胴部は縄文の上に縦状と波状の沈線を施す。
2	深鉢	口径（41.0） 器高（14.0）	口縁部～胴部の一部	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	口縁部は波状の隆帯を付し、その上に箆状工具による刺突文を施す。胴部は無文。
3	深鉢		口縁部破片	①赤褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	隆帯文。
4	深鉢		口縁・胴部破片	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒・白色砂粒	口縁部は楕円状の隆帯の中に縄文を施す。胴部は縄文の上に、縦状の3本の平行沈線と2本の波状沈線を施す。
5	深鉢		口縁・胴部破片	①淡褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部は楕円状の隆帯の中に縄文を施す。胴部は縄文。
6	深鉢		口縁部破片	①赤褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	楕円状の隆帯の中に縄文を施す。
7	深鉢		口縁部破片	①明褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	楕円状の隆帯の上とその区画内に箆状ならびに棒状工具による刺突文を施す。
8	深鉢		口縁部装飾	①褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	渦巻状の隆帯の上に半裁竹管文。
9	深鉢		口縁部装飾	①淡褐色～黒褐色 ②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	渦巻状の隆帯と、楕円状の隆帯区画文の中に縄文を施す。
10	深鉢		口縁部装飾	①暗褐色　②良好 ③細砂粒	渦巻状の隆帯に、半裁竹管文と縄文を施す。
11	土製円板	直径　2.2 厚さ　1.0		①赤褐色　②良好 ③細砂粒	縄文あり。



第７図　１号住居址出土遺物(1)



第8図　1号住居址出土遺物(2)

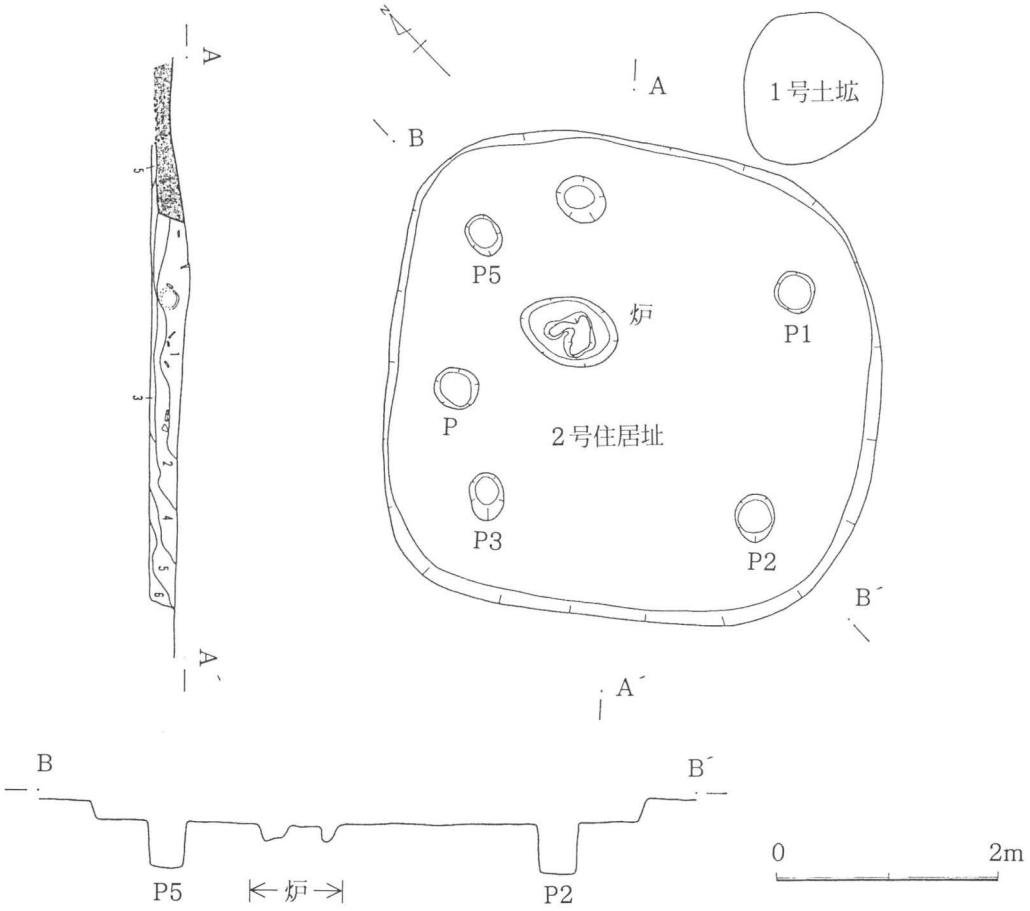


第９図　１号住居址出土遺物(3)

2号住居址（第10図）

調査区のほぼ中央部、1号住居址の南西部より検出された。約4.5×4.3mの隅丸方形をした住居で、方位は北東44°である。壁高は約15～20cmを残す。住居の中央部やや北寄りに炉と思われる長径約90cm、深さ21cmの楕円形状の掘り込みを検出し、その中に焼土ブロックが多量に認められた。

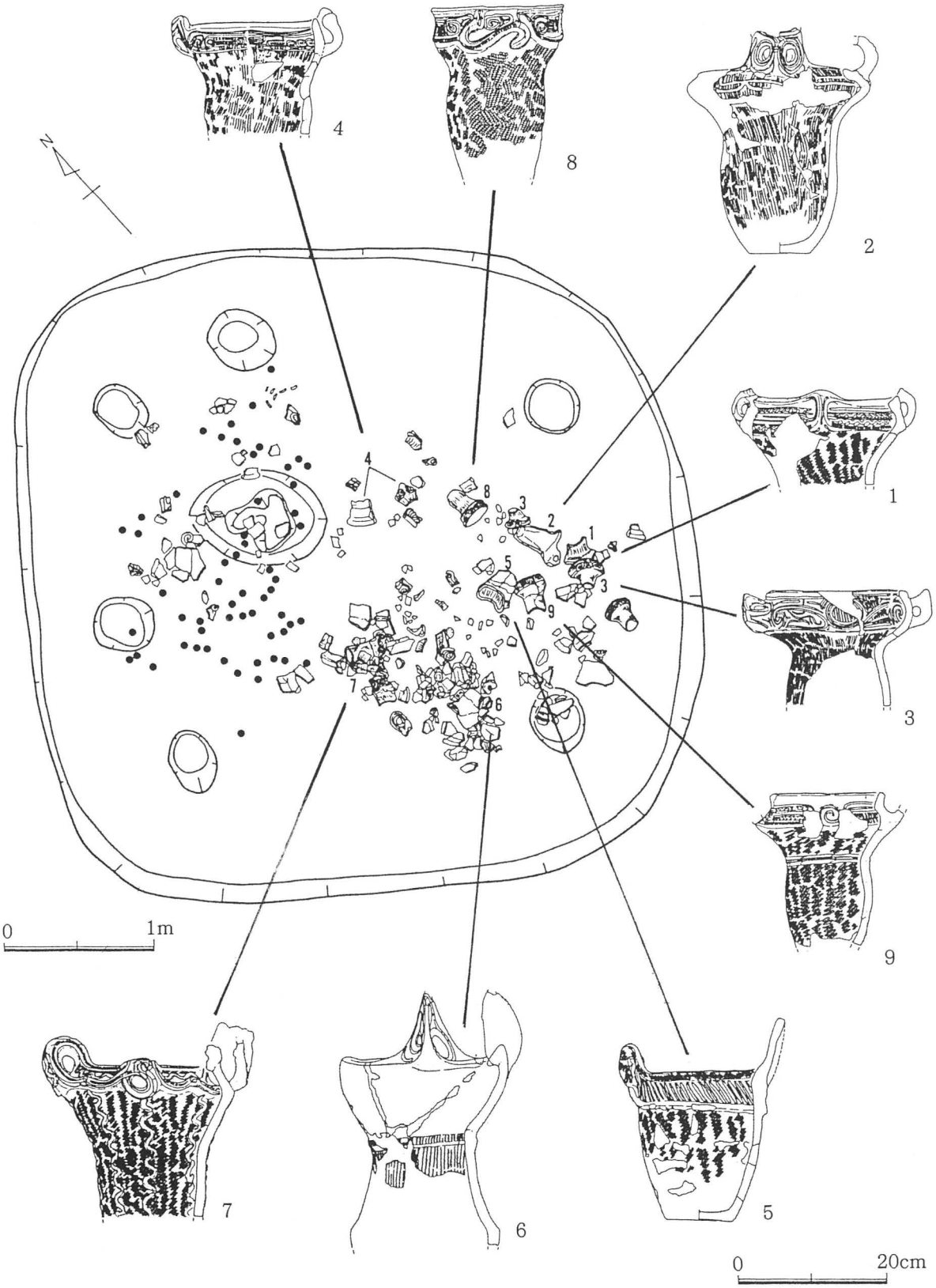
柱穴と思われるピット状の掘り込みは6本で、住居の壁際に沿って並んで検出された。ピットの深さは36～46cmである。



2号住居址土層注記

第1層	黒褐色土	粘性・締りなし	砂状粒子・ローム粒子多量に含む
第2層	暗褐色土	粘性・締りなし	砂状粒子・ローム粒子・カーボン粒子・焼土粒子少量含む
第3層	褐色土	粘性なし、締りあり	ロームブロック多量に含む　ローム粒子・カーボン粒子・焼土粒子少量含む
第4層	明褐色土	粘性なし、締りあり	砂状粒子・ローム粒子・腐植土多量に含む
第5層	黄褐色土	粘性なし、締りあり	ローム粒子多量に含む　カーボン粒子・焼土粒子・腐植土少量含む
第6層	黄褐色土	粘性・締りあり	ロームブロック・ローム粒子多量に含む　腐植土少量含む

第10図　2号住居址平面図および断面図



第11図　2号住居址遺物出土状態図

2号住居址出土遺物（第12～17図）

本調査区中で一番遺物の出土量の多い住居址で、住居の中央から東部分にかけて集中して出土した。出土した遺物は、縄文時代中期の土器や石器等が中心で、実測可能なものは土器が36点、土製円板が6点、石器が17点であった。

そのうち、完形または復元可能な形で出土した土器は、深鉢（1～12）の12点、口縁部と胴部の一部が残されている深鉢（13～15）が3点で、その他は深鉢の底部（16）1点、深鉢または浅鉢の口縁部（17～30）14点、口縁部の装飾部分（31～36）6点であった。土製円板（37～42）は6点出土し、直径が1.7cmから3.7cmの大きさで、表面に縄文が施されているものと無文のものが出土した。（土器と土製円板の詳細は表2を参照）

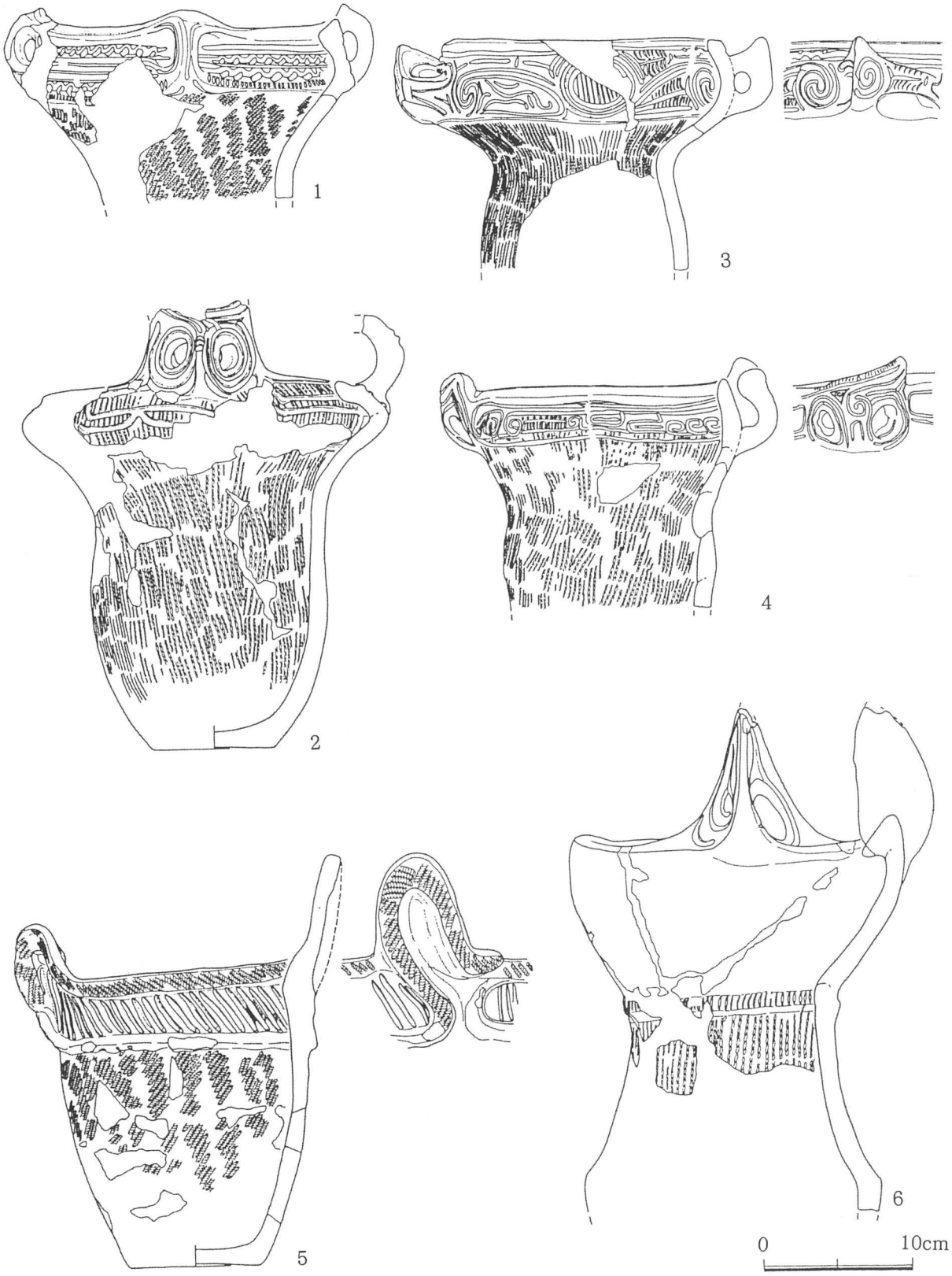
石器の内容は、フレークが1点、石斧が5点、磨石が7点、敲石など使用痕が認められた石器が3点、石皿が1点であった。フレーク（1）の石材はチャートである。また、石斧（2～6）の石材は2・4・6が粘板岩質、3・5が砂岩質である。磨石（7～13）の石材は7～9が砂岩質で、10～13が安山岩質である。敲石などの使用痕のある石器（14～16）の石材はいずれも砂岩質で、石皿（17）の石材は安山岩質である。

〈表2〉　2号住居址出土遺物観察表（土器類）

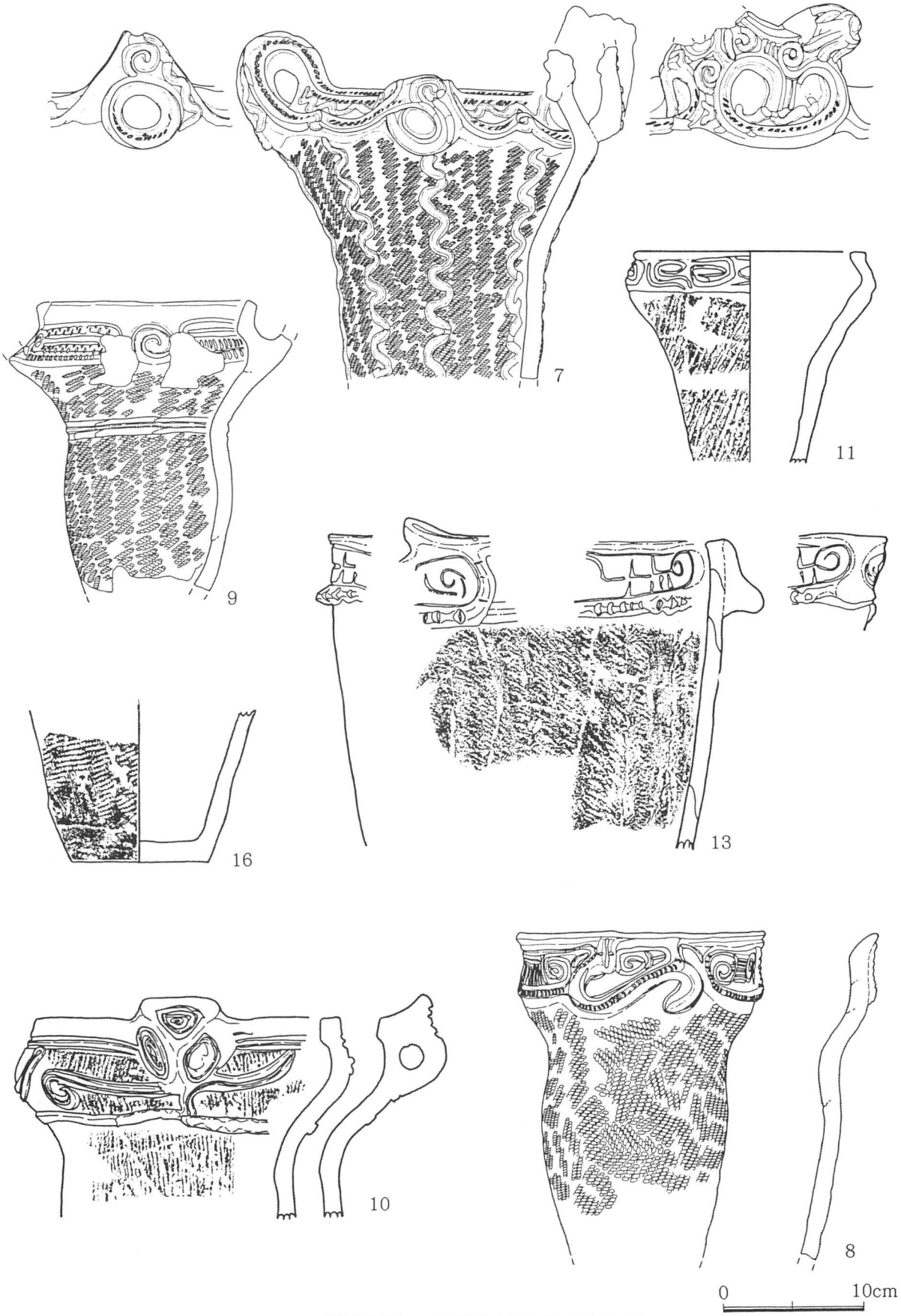
番号	器　種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴、備考
1	深鉢	口径　19.4 器高（13.4）	口縁部 ～胴部	①淡褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部は平行沈線をめぐらし、その間に波状文を施す。3つの山形突起を付ける。胴部は縄文。
2	深鉢	器高　29.9	口縁部 ～底部 （1／4）	①暗褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部は縄文を施しその上に隆帯を付す。渦巻状の山形突起を付ける。胴部は縄文。
3	深鉢	口径　17.2 器高（15.0）	口縁部 ～胴部	①淡褐色～明褐色 ②良好　③細砂粒	口縁部は渦巻文と区画文を配し、渦巻文から派生する沈線で区画文を構成。区画内は爪型文を施す。2つの渦巻状の山形突起を付す。胴部は縄文。
4	深鉢	口径　15.2 器高（16.7）	口縁部 ～胴部 （3／4）	①淡褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部は沈線による区画文の中に不定形の渦巻文を配し、2つの渦巻状の山形突起を付す。胴部は縄文。
5	深鉢	口径　14.8 器高　27.6	ほぼ完形	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒	口縁部は隆帯による区画内に縦位の沈線。口縁部より連続した隆帯による山形突起を2つ付し、その上に縄文を施す。胴部は縄文。
6	深鉢	口径　16.5 器高（33.8）	口縁部 ～胴部	①黒褐色　②良好 ③粗砂粒	口縁部に渦巻状の山形突起を付す。頸部に隆帯に付し、その上に縦位の沈線を施す。胴部は縄文。
7	深鉢	口径　15.6 器高（26.3）	口縁部 ～胴部	①暗褐色　②良好 ③白色細砂粒	口縁部は隆帯による区画を配し、連続して渦巻状の山形突起を3つ付す。区画内に隆帯による波状文を付す。胴部は縄文を施し、隆帯による縦位の波状文を付す。
8	深鉢	口径　18.0 器高（23.4）	底部欠損・ほぼ完形	①明褐色～暗褐色 ②良好　③粗砂粒	口縁部は隆帯によるS字文と区画文を施し、区画内に沈線による渦巻文と横位と縦位の線を付す。隆帯上に爪型文を付ける。胴部は縄文。

番号	器　種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴、備考
9	深鉢	口径　13.9 器高（20.8）	底部欠損・ほぼ完形	①明褐色～暗褐色 ②良好　③細砂粒	口縁部は沈線による渦巻文と区画文を施し、その中に波状文と爪型文を付す。頸部に隆帯を付ける。胴部は縄文。
10	深鉢	口径　21.0 器高（15.5）	口縁部～胴部	①褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部は隆帯による渦巻文を付し、その上に沈線を施す。渦巻状の山形突起を付ける。胴部は縄文。
11	深鉢	口径　16.2 器高（14.7）	口縁部～胴部	①灰褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部は沈線による連続した渦巻文を付す。胴部は縄文。
12	深鉢	口径　23.0 器高（16.5）	口縁部～胴部	①褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	口縁部は波状の隆帯を付し、その下位に渦巻状の隆帯と縦位の沈線を施す。胴部は櫛掻文。
13	深鉢	口径　28.0 器高（23.0）	口縁部～胴部	①褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部は隆帯による渦巻文を付し、その上に沈線と半裁竹管文を施す。胴部は縄文。
14	深鉢		口縁部～胴部	①明褐色　②良好 ③細砂粒・金雲母粒子	口縁部から胴部にかけて縄文を施し、口縁部には隆帯による連続した渦巻文を付す。
15	深鉢	口径（32.2） 器高（25.1＋10.5）	口縁部～胴部	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・白色砂粒	口縁部に2本の平行沈線を施し、その間を波状に成形。その下に2本の平行沈線とその間に爪型文を付す。胴部は縄文。
16	深鉢	器高（30.5）	底　部	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	胴部は縄文。
17	深鉢		口縁部破片	①褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	口縁部は沈線による区画の中に斜めの刺突沈線文を連続して付す。その下に波状沈線文を施す。
18	深鉢	口径（30.0）	口縁部破片	①褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	口縁部は刺突沈線文を巡らし、一部楕円状の突起を付す。突起上に刺突沈線文と縄文を施す。
19	深鉢	口径（110.8）	口縁部破片	①明褐色　②良好 ③細砂粒・金雲母粒子	口縁部は隆帯による渦巻状の模様を付し、その隆帯が連続して把手状になる。
20	浅鉢	口径（35.6）	口縁部破片	①褐色　②良好 ③粗砂粒	箆状工具で成形。無文。
21	浅鉢	口径（35.0）	口縁部破片	①明褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部は隆帯による渦巻状の模様を付す。
22	深鉢	口径（20.8）	口縁部破片	①明褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	隆帯と沈線による渦巻文を付す。
23	深鉢	口径（19.0）	口縁部破片	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	口唇部に隆帯を巡らし、その下位に隆帯による区画文の中に縦状の波状隆帯と縄文を施す。
24	浅鉢		口縁部破片	①褐色　②良好 ③白色粗砂粒	2本の斜めの隆帯とその上に棒状工具で刺突文を施す。穿孔が1個あり。
25	深鉢		口縁部破片	①淡褐色　②良好 ③細砂粒・金雲母粒子	2本の平行沈線の間に縄文を施す。

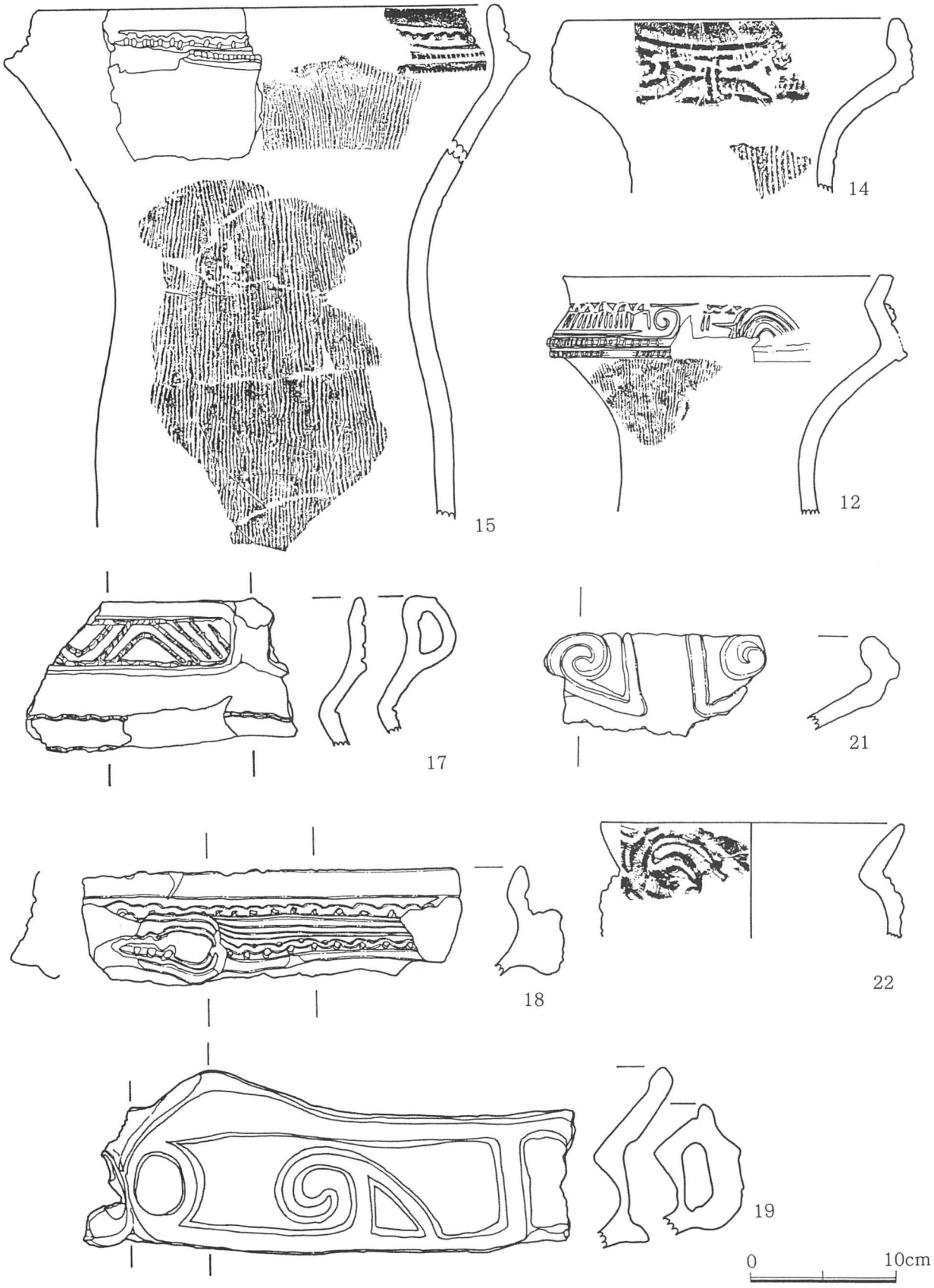
番号	器　種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴、備考
26	深鉢		口縁部 破片	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	口縁部は波状隆帯が付され、その上に爪型文を施す。胴部は縄文。
27	深鉢		口縁部 破片	①褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	半円状の突起を付しその上に沈線を施す。胴部は縄文。
28	深鉢		口縁部 破片	①淡褐色　②良好 ③細砂粒・金雲母粒子	渦巻状の突起を付しその上に沈線を施す。
29	深鉢		口縁部 破片	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	隆帯による渦巻文を施す。
30	浅鉢	口径（18.2）	口縁部 破片	①褐色　②良好 ③粗砂粒	隆帯による渦巻文を付し、その上に爪型文を施す。その下位に縄文。
31	深鉢		口縁部 装飾	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・白色粒子	山形突起に穿孔があり、その周囲に半裁竹管文を付す。口縁部には平行する2本の波状隆帯が付され、その上に半裁竹管文を施す。胴部は縄文。
32	深鉢		口縁部 装飾	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒	隆帯による文様と穿孔を付す。
33	深鉢		口縁部 装飾	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒	突起状の装飾で、上面と側面3面に沈線による渦巻文を付す。
34	深鉢		口縁部 装飾	①暗褐色　②良好 ③細砂粒・金雲母粒子	突起状の装飾で、隆帯による渦巻文を四面に付し、その上に沈線を施す。
35	深鉢		口縁部 装飾	①赤褐色　②良好 ③粗砂粒	ドーナッ状の突起で裏表ならびに側面に隆帯を付す。
36	深鉢		口縁部 装飾	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒	突起状の装飾で、表面は隆帯による渦巻文を付し、その上に沈線を施す。裏面は沈線。
37	土製円板	直径　3.2 厚さ　1.2		①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	縄文の上に沈線あり。
38	土製円板	直径　2.5 厚さ　1.2		①淡褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	縄文あり。
39	土製円板	直径　3.7 厚さ　1.0		①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	縄文あり。
40	土製円板	直径　1.8 厚さ　1.1		①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	縄文あり。
41	土製円板	直径　3.0 厚さ　1.2		①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	縄文あり。
42	土製円板	直径　1.7 厚さ　1.0		①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	無文。



第12図　2号住居址出土遺物(1)

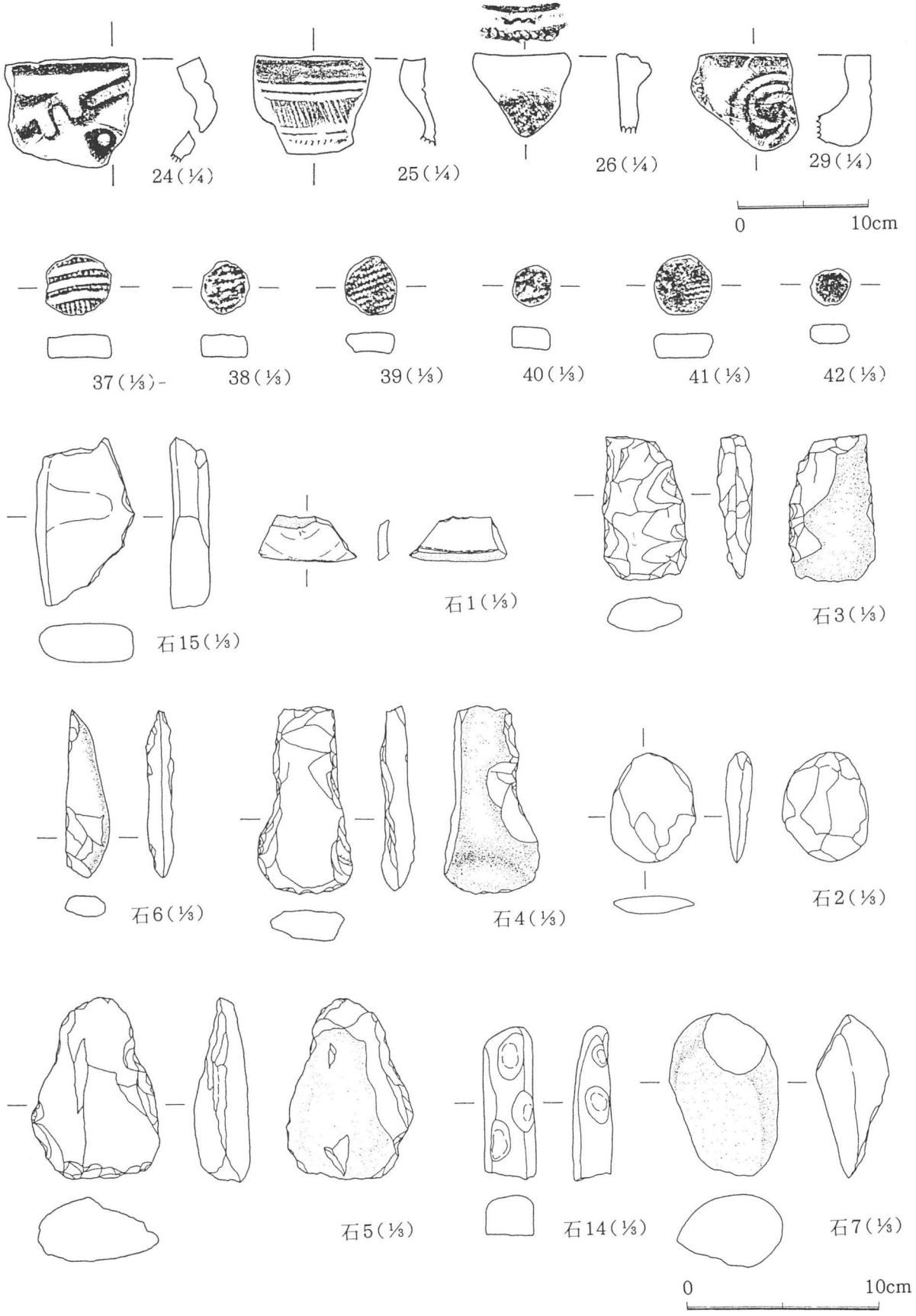


第13図　2号住居址出土遺物(2)

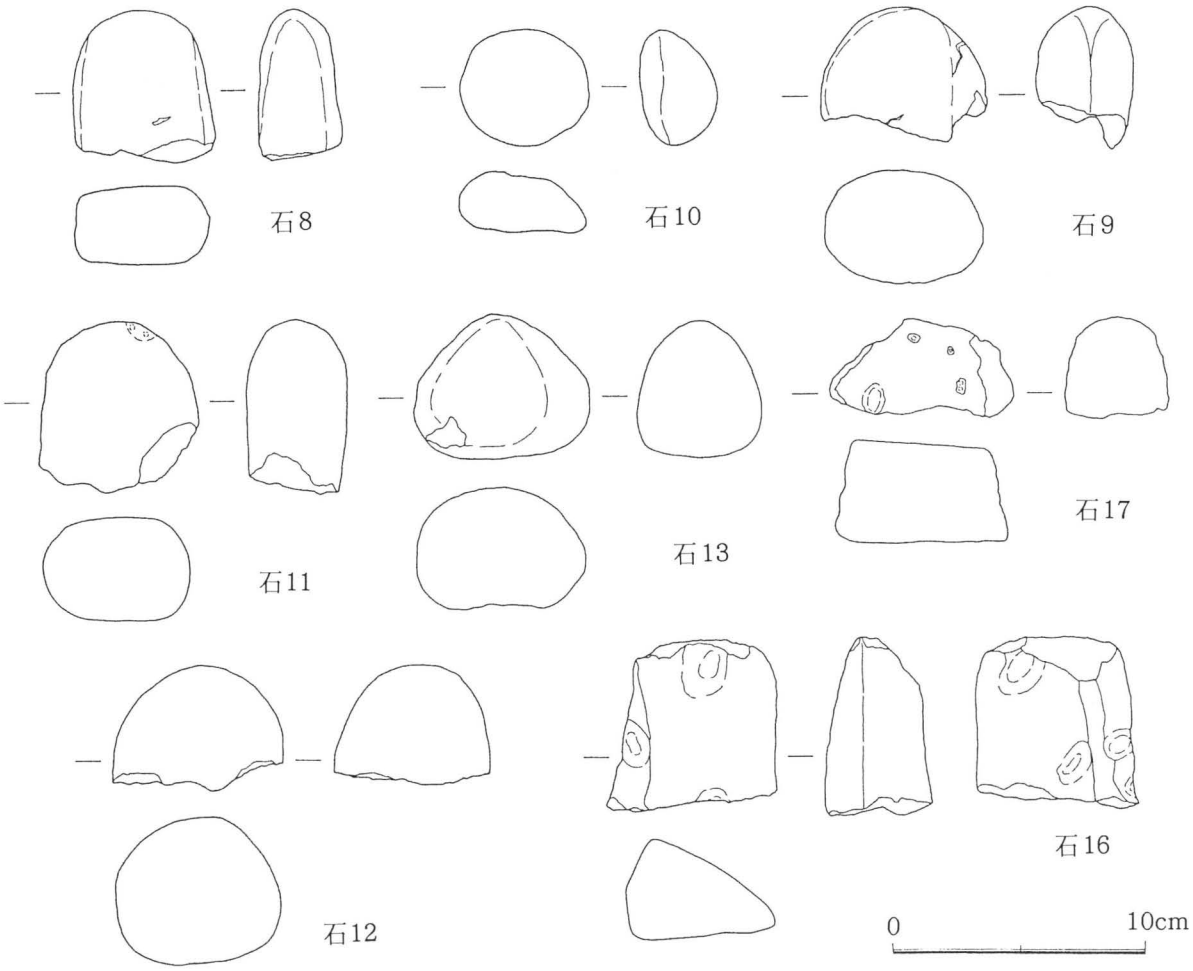


第14図　2号住居址出土遺物(3)

第15図　2号住居址出土遺物(4)



第16図　2号住居址出土遺物(5)

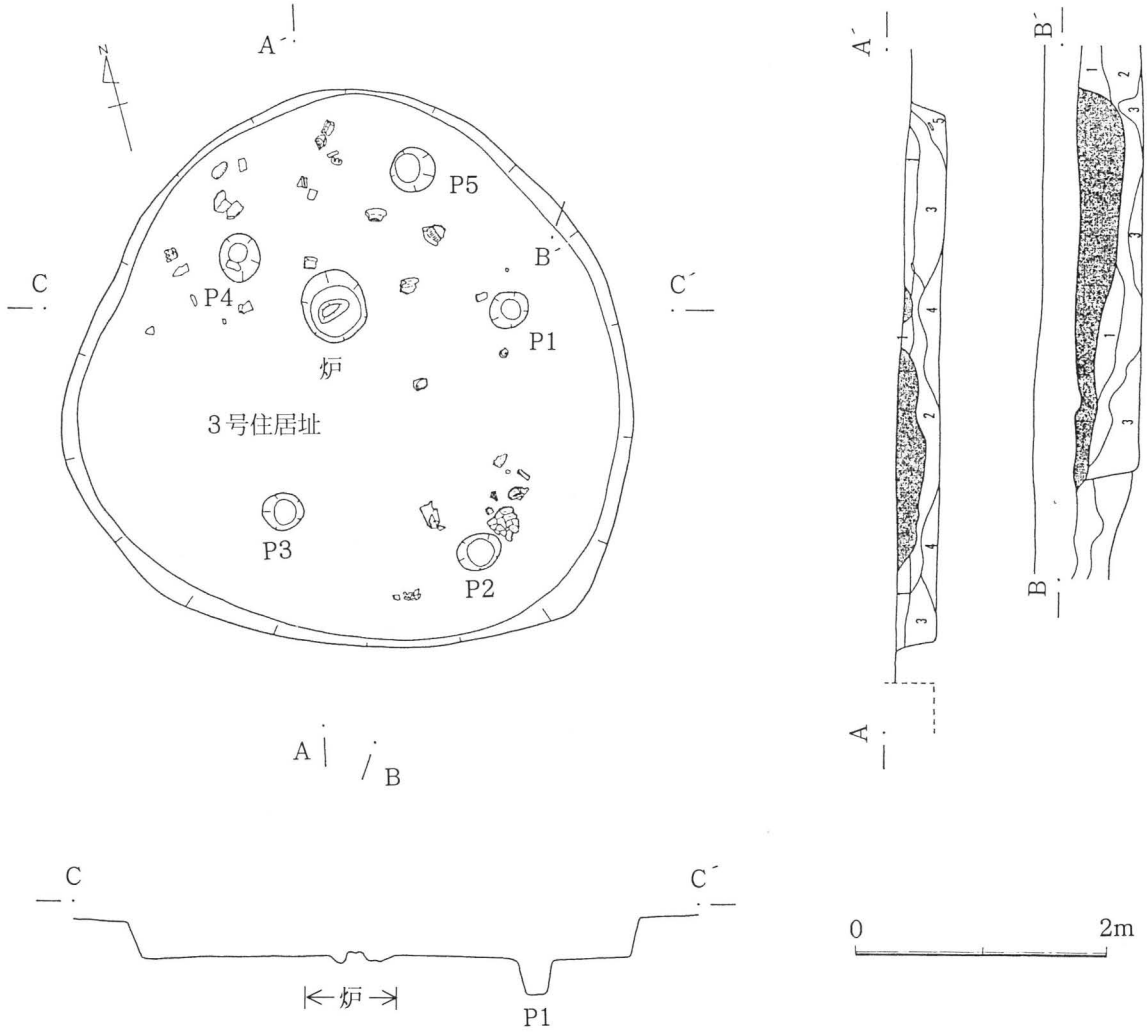


第17図　2号住居址出土遺物(6)

3 号 住 居 址（第18図）

調査区の北東部、1号住居址の北部に隣接して検出された。直径約4.5mのやや不定形をした円形の住居である。壁高は約25～37cmを残す。住居の中央部やや北寄りに炉と思われる長径約60cm、深さ5cmの楕円形状の掘り込みを検出し、その中に焼土ブロックが少量認められた。

柱穴と思われるピット状の掘り込みは5本で、住居の壁際に沿って並んで検出された。ピットの深さは27～47cmである。



3号住居址土層注記

第1層	灰褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子・砂状粒子・カーボン粒子多量に含む　酸化鉄粒子がブロック状に混入
第2層	黒褐色土	粘性あり、締りなし	ローム粒子・砂状粒子少量含む　カーボン・焼土粒子多量に含む
第3層	暗褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子多量に含む　カーボン・焼土粒子少量含む　酸化鉄粒子がブロック状に混入
第4層	黄灰褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子・ロームブロック多量に含む　カーボン・焼土粒子少量含む
第5層	黄褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子・ロームブロック多量に含む　酸化鉄粒子がブロック状に混入

第18図　3号住居址平面図および断面図

3号住居址出土遺物（第19～20図）

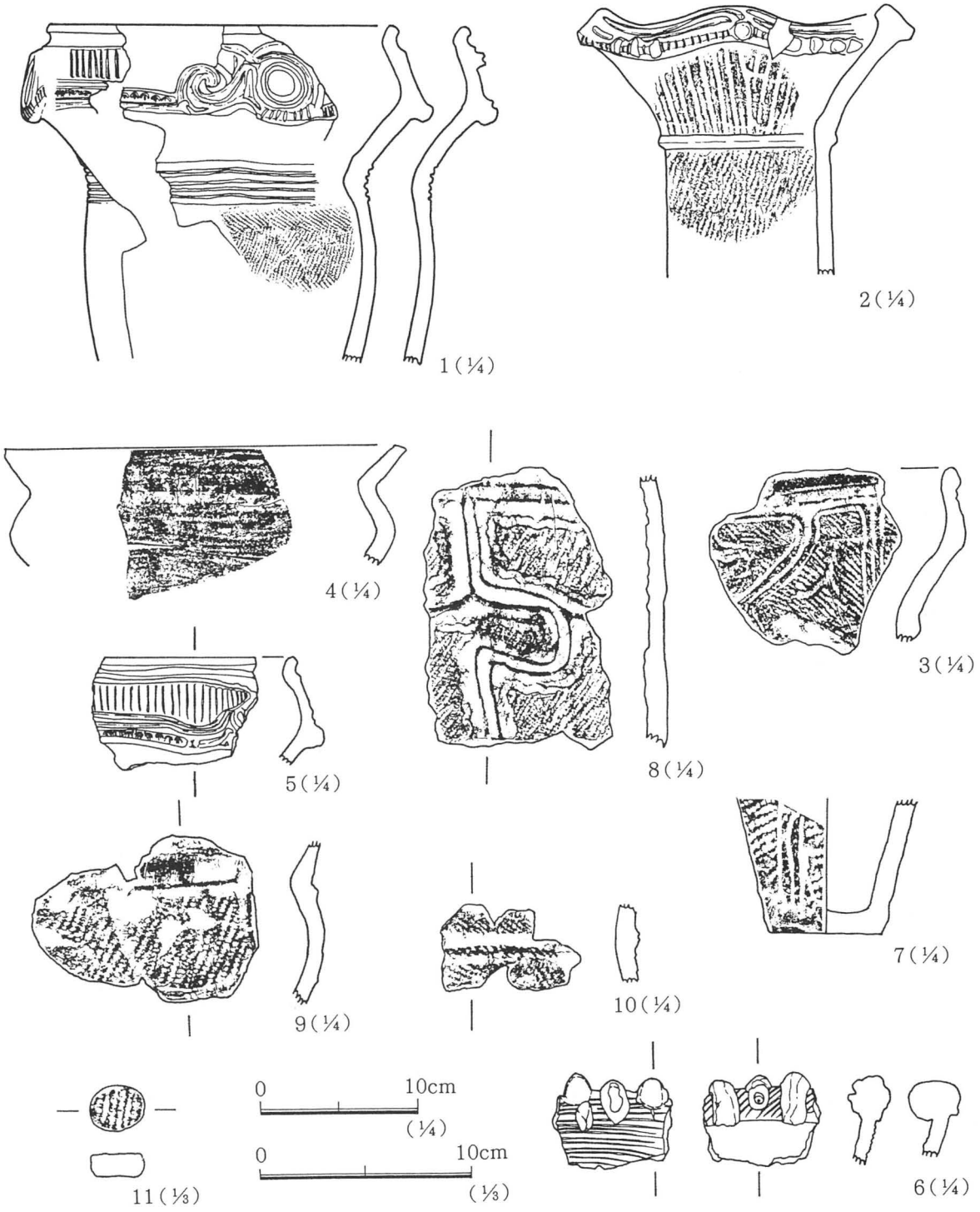
出土した遺物は、縄文時代中期の土器や石器等が中心で、実測可能なものは土器が10点、土製円板が1点、石器が11点であった。

そのうち、完形または復元可能な形で出土した土器は、深鉢（1・2）の2点で、その他は深鉢または浅鉢の口縁部（3～6）4点、底部と胴部（7～10）4点であった。土製円板（11）は直径2.4cmをし、表面に縄文が施されている。（土器と土製円板の詳細は表3を参照）

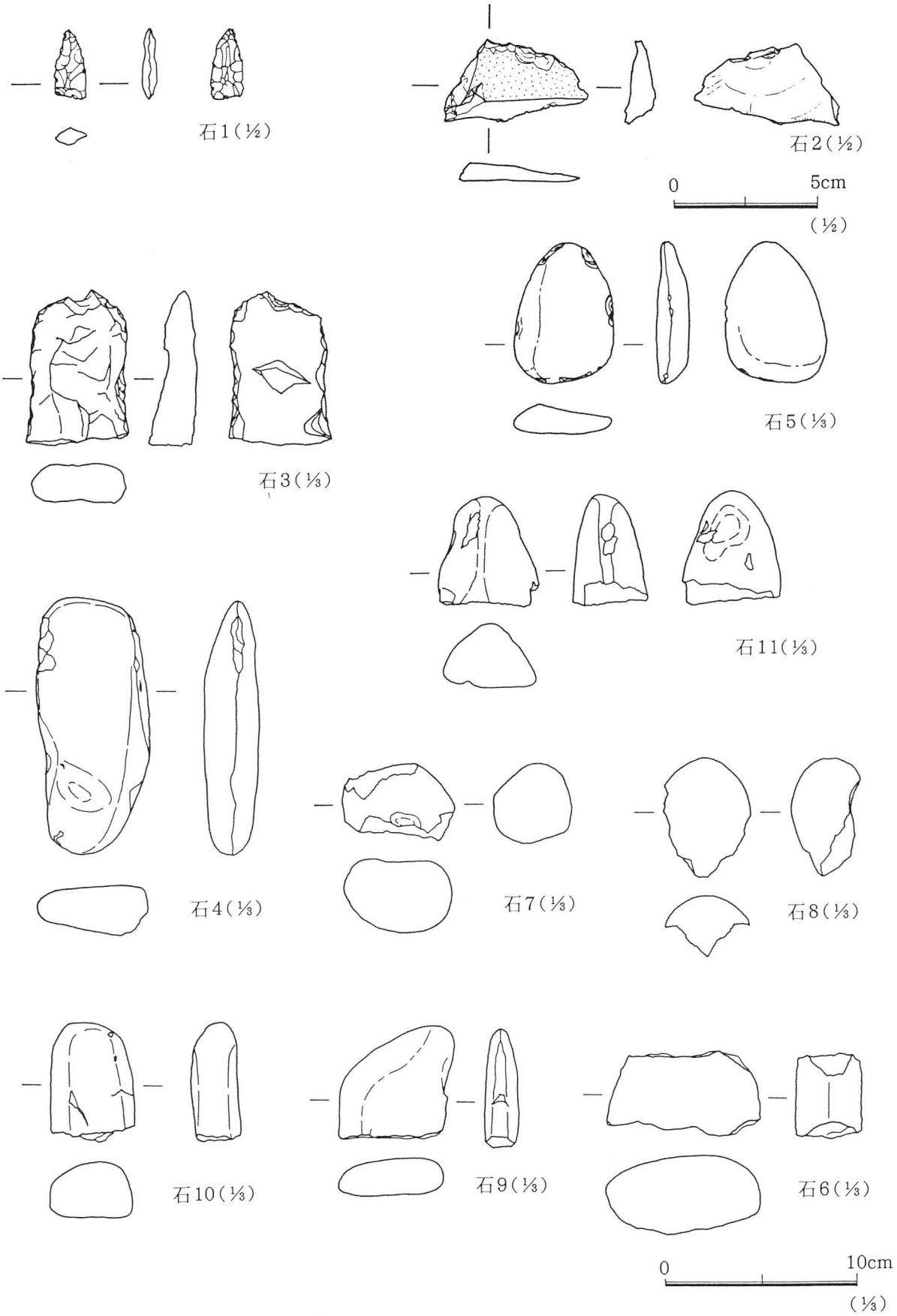
石器の内容は、石鏃が1点、フレークが1点、石斧が3点、磨石が4点、敲石など使用痕が認められた石器が2点であった。石鏃（1）の石材は瑪瑙、フレーク（2）の石材はチャートである。また、石斧（3～5）の石材は3・5が粘板岩質、4が砂岩質である。磨石（6～9）の石材は6・8が安山岩質、7が凝灰岩質、9が砂岩質である。また、敲石などの使用痕のある石器（10～11）の石材はいずれも砂岩質である。

〈表3〉　3号住居址出土遺物観察表（土器類）

番号	器　種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴、備考
1	深鉢	口径　21.5 器高（21.5）	口縁部 ～胴部 （1／2）	①淡褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部は隆帯による渦巻文とそれに連続する区画文を付し、その中に縦状の沈線を施す。その下に沈線を巡らし、その中に半裁竹管文を付す。胴部は縄文。
2	深鉢	口径　18.3 器高（17.0）	口縁部 ～底部 （1／2）	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	口縁部はなだらかな山形をし、隆帯と沈線を巡らす。隆帯上に指押文と刺突文を施す。胴部は縄文。
3	深鉢		口縁部 破片	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	縄文を施し、その上に3本の平行沈線で文様を付す。
4	浅鉢		口縁部 破片	①赤褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	箆状工具で成形。無文。
5	浅鉢		口縁部	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒	沈線による区画を配し、その中に縦状の沈線を施す。その下位に半裁竹管文を付す。
6	深鉢		口縁部 破片	①褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部の外側に平行沈線と内側に斜めの平行沈線を施す。口唇部に小さな山形突起とボタン状の突起を付す。
7	深鉢	器高　（8.5）	底部～ 胴部	①淡褐色　②良好 ③細砂粒	胴部は縄文を施し、その上に縦状の3本の平行沈線を付す。
8	深鉢		胴部破 片	①褐色　②良好 ③細砂粒	縄文を施し、その上に2本の平行沈線による区画文を付す。
9	深鉢		胴部破 片	①黒褐色～暗褐色 ②良好 ③粗砂粒・白色砂粒子	隆帯による楕円形の区画に縄文を施す。
10	深鉢		胴部破 片	①淡褐色　②良好 ③白色砂粒子	2本の隆帯上に連続した爪型文を付す。
11	土製円板	直径　2.4 厚さ　1.1		①暗褐色　②良好 ③粗砂粒	縄文あり。



第19図　3号住居址出土遺物(1)

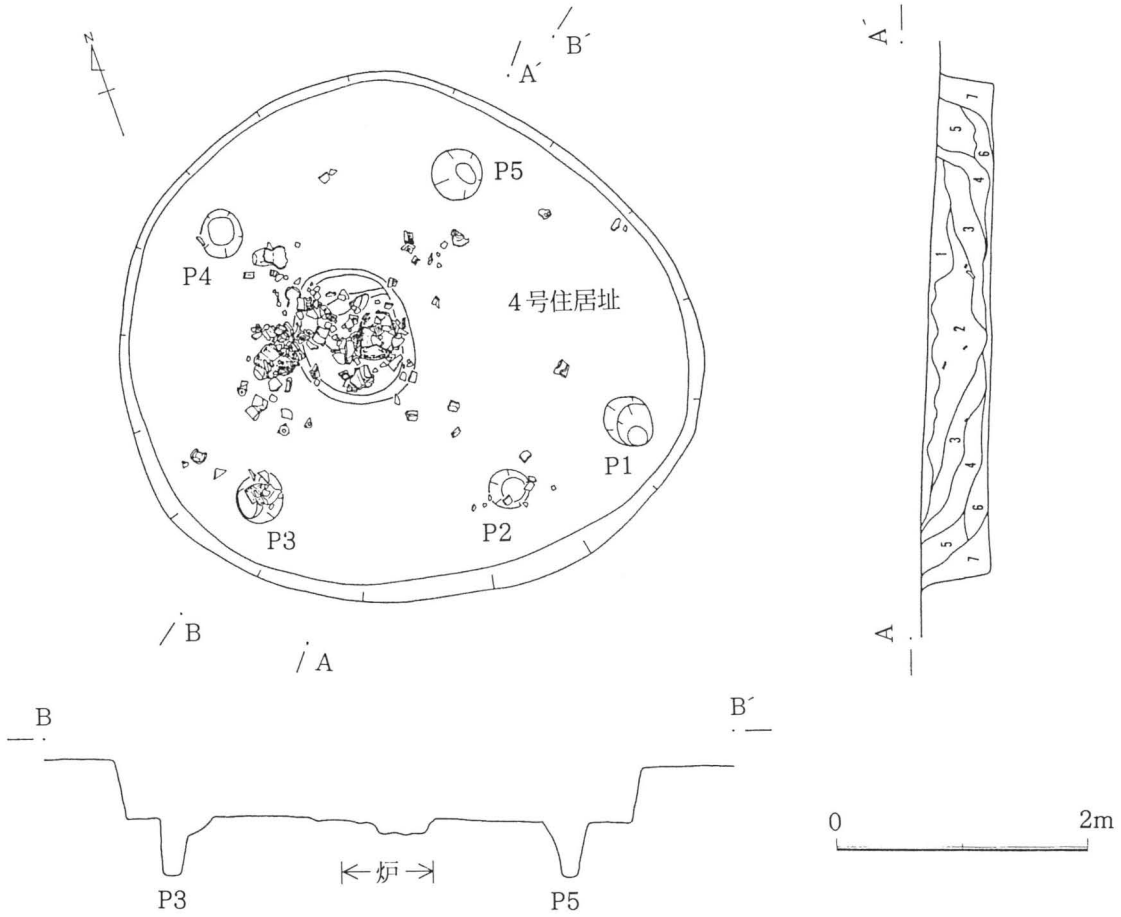


第20図　3号住居址出土遺物(2)

4 号 住 居 址（第21図）

調査区のほぼ北部、3号住居址の北東部より検出された。約4.7×4.2mの楕円形をした住居で、長軸の方位は北西55°である。壁高は約40～51cmを残し、本調査区の中で最も深い住居である。住居の中央部やや北寄りに炉と思われる長径約1.2m、深さ5cmの楕円形状の掘り込みを検出し、その中に焼土ブロックが少量認められた。

柱穴と思われるピット状の掘り込みは5本で、住居の壁際に沿って並んで検出された。ピットの深さは36～46cmである。



4号住居址土層注記

第1層	灰黒褐色土	粘性なし、締りあり	砂状粒子多量に含む　カーボン粒子少量含む　火山灰と思われる白色粒子微量混入
第2層	黒褐色土	粘性なし、締りあり	カーボン粒子・焼土粒子多量に含む　酸化鉄粒子がブロック状に混入
第3層	暗褐色土	粘性なし、締りあり	ローム粒子多量に含む　カーボン粒子微量混入
第4層	茶褐色土	粘性なし、締りあり	ローム粒子多量に含む　焼土粒子微量混入　ロームブロック点在
第5層	明褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子・白色粒子多量に含む　ロームブロック点在
第6層	茶褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子・砂状粒子多量に含む　カーボン粒子・焼土粒子微量混入
第7層	黄褐色土	粘性・締りあり	ローム粒子・ロームブロック多量に含む

第21図　4号住居址平面図および断面図

4号住居址出土遺物（第22～25図）

本調査区中で2号住居址に次いで出土遺物の多い住居址で、住居の中央付近に集中して出土した。出土した遺物は、縄文時代中期の土器や石器等が中心で、実測可能なものは土器が27点、土製円板が3点、石器が15点であった。

そのうち、完形または復元可能な形で出土した土器は、深鉢または浅鉢（1～3）の3点、口縁部と胴部の一部が残されている深鉢（4・5）が2点で、その他は深鉢の底部（6～10）5点、深鉢または浅鉢の口縁部（11～19）9点、口縁部の装飾部分（20～25）6点、胴部（26）が1点、ミニチュア土器の底部（27）が1点であった。土製円板（28～30）は3点出土し、直径が2.2cmから3.0cmの大きさで、表面に縄文が施されているものと無文のものが出土した。（土器と土製円板の詳細は表4を参照）

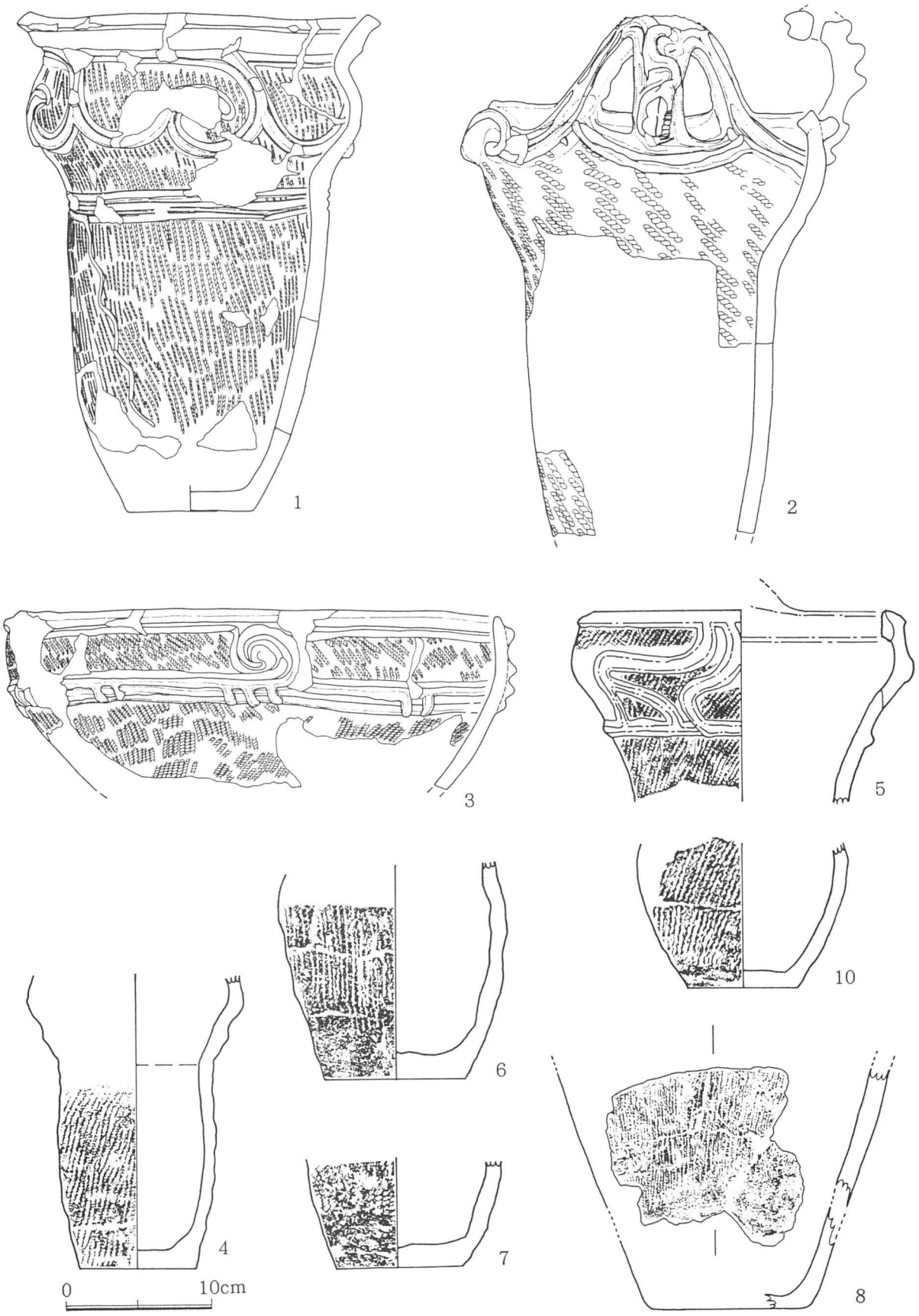
石器の内容は、石斧が6点、磨石が5点、敲石など使用痕が認められた石器が3点、凹石が1点であった。

石斧（1～6）の石材は1・3が砂岩質、2・5が粘板岩質、4・6が花崗岩質である。磨石（7～11）の石材は7・11が凝灰岩質、8が砂岩質、9・10が安山岩質である。敲石などの使用痕のある石器（12～14）の石材は12が凝灰岩質、13・14が砂岩質である。石皿（15）の石材は花崗岩質である。

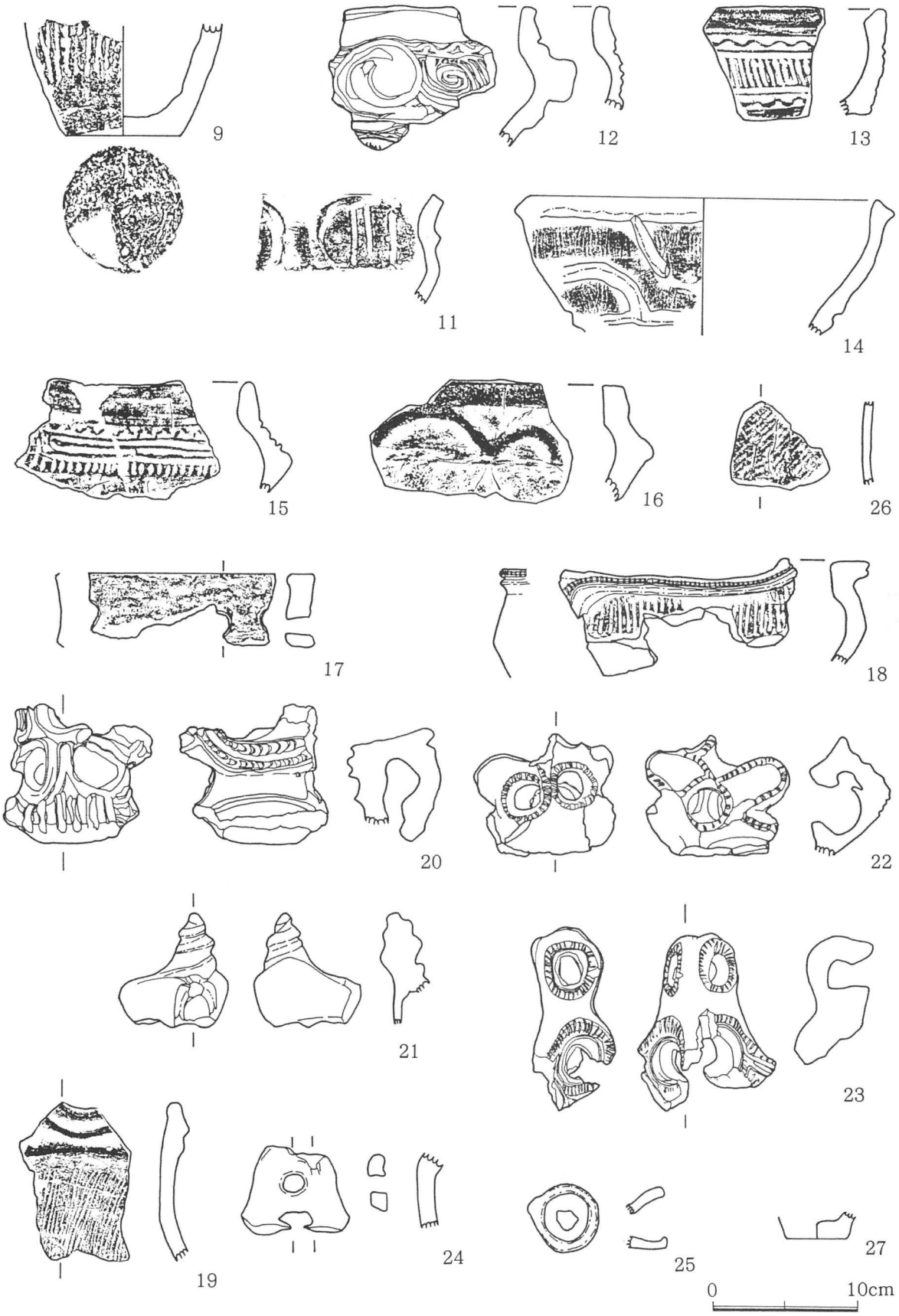
〈表4〉　4号住居址出土遺物観察表（土器類）

番号	器　種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴、備考
1	深鉢	口径　22.8 器高　34.5	ほぼ完形	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒	口縁部は縄文を施し、その上に隆帯による渦巻文と波状文を付す。頸部に3本の平行沈線を巡らす。胴部は縄文を施し、その上に縦位の波状沈線を1本付す。
2	深鉢	口径　21.5 器高（36.2）	口縁部～胴部（3／4）	①暗褐色　②良好 ③細砂粒	口縁部は隆帯によるS字文様と2本の平行沈線を付す。平行文が連続して1つの山形突起を構成。胴部は縄文。
3	浅鉢	口径　32.1 器高（13.1）	口縁部～胴部（3／4）	①明褐色　②良好 ③白色粗砂粒	口縁部は隆帯による渦巻文と区画文を配し、区画内には縄文を施す。胴部は縄文。
4	深鉢	器高（20.3）	口縁部欠損	①淡赤褐色　②良好 ③粗砂粒	残存する口縁部の一部に3本の平行沈線を巡らす。胴部は縄文。
5	深鉢	口径　22.5 器高（14.0）	口縁部～胴部	①褐色　②良好 ③粗砂粒	口縁部から胴部にかけて縄文を施し、その上に隆帯による区画文を付す。
6	深鉢	器高（15.0）	底部～胴部	①明赤褐色　②良好 ③粗砂粒	胴部は縄文。
7	深鉢	器高　（8.5）	底部～胴部	①明褐色　②良好 ③粗砂粒	胴部は縄文。
8	深鉢		底部破片	①淡赤褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	胴部は縄文。
9	深鉢	器高　（7.7）	底部～胴部	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒	胴部は縄文。底部に網代痕あり。
10	深鉢	器高　（9.7）	底部～胴部	①赤褐色　②良好 ③粗砂粒	胴部は縄文。
11	浅鉢		口縁部破片	①灰褐色　②良好 ③細砂粒	楕円状の隆帯で区画し、その中に縦位の沈線を付す。

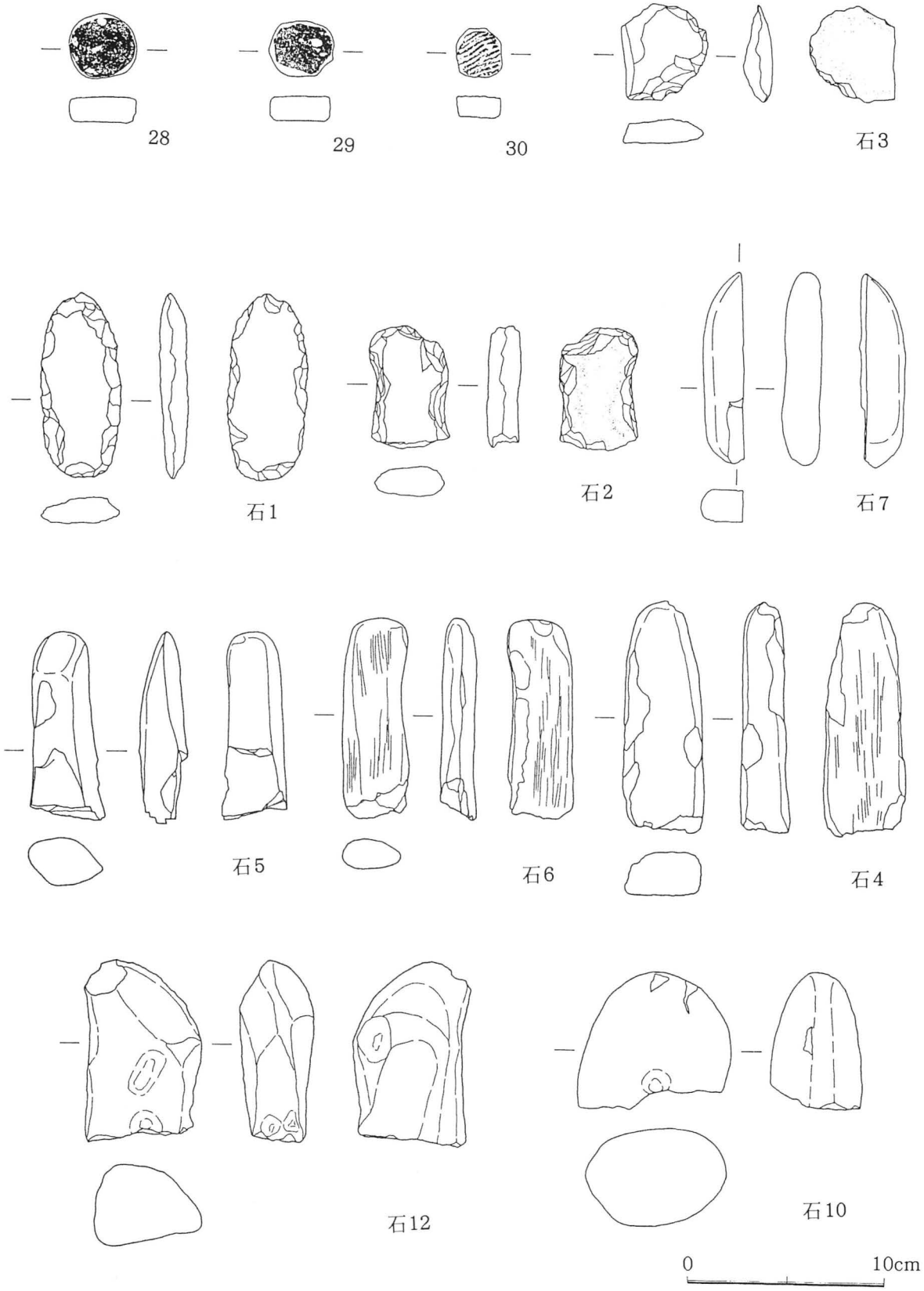
番号	器　種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴、備考
12	深鉢		口縁部破片	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒	隆帯による渦巻文とその横に沈線による渦巻文を配し、その間に刺突文と爪型文を施す。
13	深鉢		口縁部破片	①淡褐色　②良好 ③細砂粒	波状沈線を2段に巡らし、その間に連続した縦位の沈線を付す。
14	深鉢		口縁部破片	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	縄文を施し、その上に隆帯による文様を付す。
15	深鉢		口縁部破片	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒	刺突文による波状文様を巡らし、その下位に３本の平行沈線と爪型文を巡らす。
16	浅鉢		口縁部破片	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒	連続した半円形の隆帯を巡らす。
17	深鉢		口縁部破片	①赤褐色　②良好 ③粗砂粒	円形の穿孔を付す。
18	深鉢	口径（23.3）	口縁部破片	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒	口唇部に隆帯を巡らし、その上に沈線と半裁竹管文を付す。
19	深鉢		口縁部	①褐色　②良好 ③細砂粒・金雲母粒子	隆帯による文様を付し、その下位に縄文を施す。
20	深鉢		口縁部装飾	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒	突起状の装飾で、3つの穿孔と、その周囲と下位に隆帯による文様を付す。内側は２本の平行沈線と刺突文を施す。
21	深鉢		口縁部装飾	①明褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	巻き貝状の装飾で、その上に縄文を施す。
22	深鉢		口縁部装飾	①淡赤褐色　②良好 ③粗砂粒	突起状の装飾で、円状の隆帯を組み合わせ、その上に半裁竹管文を付す。
23	深鉢		口縁部装飾	①黒褐色　②良好 ③粗砂粒・白色砂粒	突起状の装飾で、3か所の穿孔が上下２段に構成され、穿孔の回りに爪型文を施す。
24	深鉢		口縁部装飾	①暗褐色　②良好 ③細砂粒・金雲母粒子	突起状の装飾で、穿孔が２個あり。無文。
25	深鉢		口縁部装飾	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒	突起状の円形装飾で、無文。
26	深鉢		胴部破片	①暗褐色　②良好 ③細砂粒・金雲母粒子	縄文。
27	ミニチュア土器		底部破片	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	無文。
28	土製円板	直径　3.0 厚さ　1.3		①淡褐色　②良好 ③細砂粒	無文。
29	土製円板	直径　3.0 厚さ　1.3		①暗褐色　②良好 ③粗砂粒	無文。
30	土製円板	直径　2.2 厚さ　1.0		①暗褐色　②良好 ③粗砂粒	縄文あり。



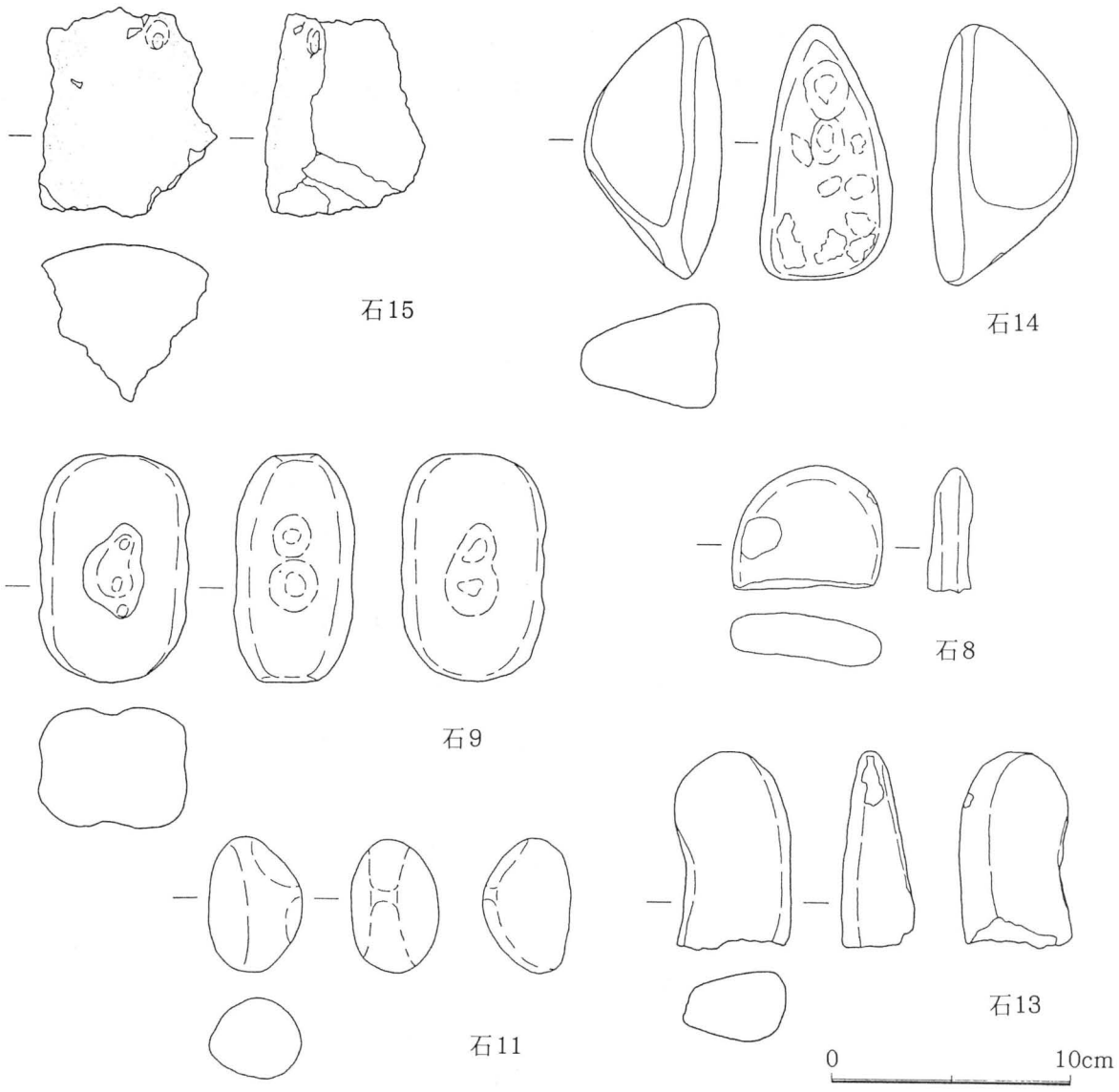
第22図　4号住居址出土遺物(1)



第23図　4号住居址出土遺物(2)



第24図　4号住居址出土遺物(3)

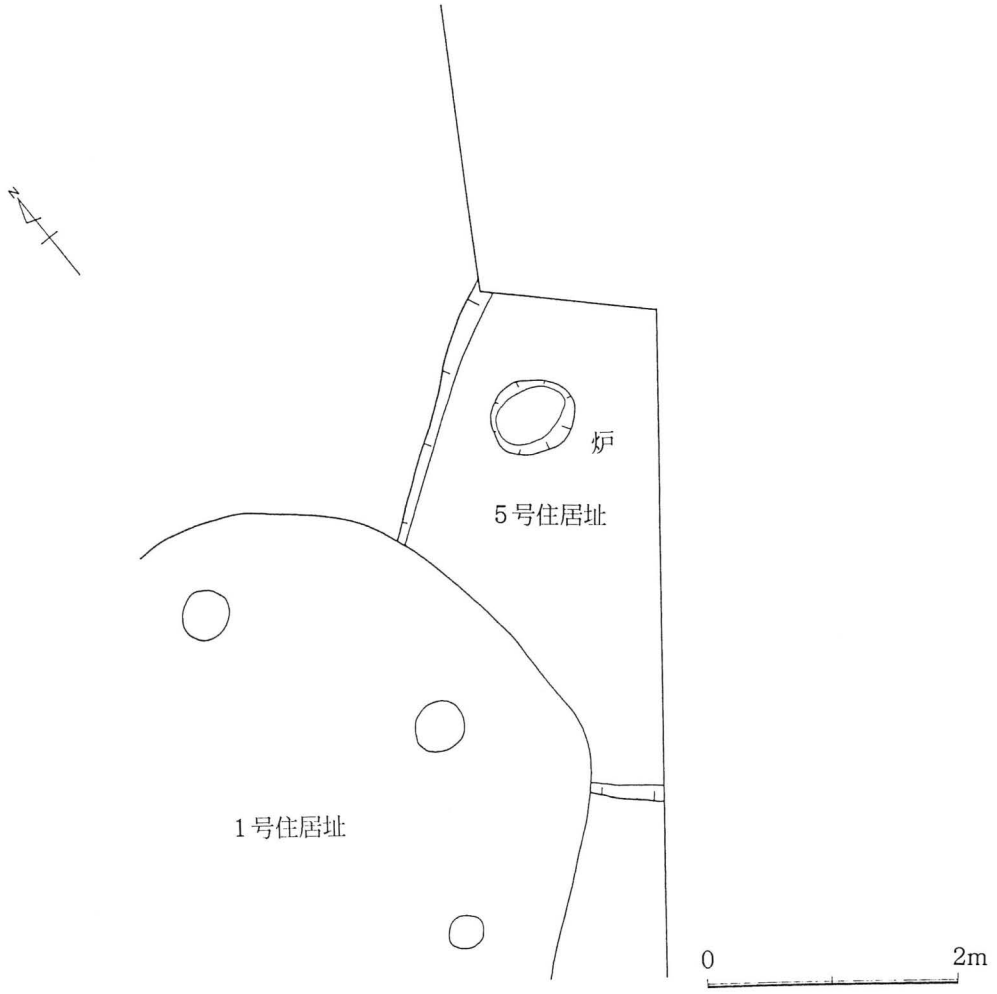


第25図　4号住居址出土遺物(4)

5 号 住 居 址（第26図）

調査区の東端部、1号住居址と重複して検出され、東側の調査区外に未調査部分を残す。

このため、全体の大きさや形状、ピット状の掘り込みは確認できなかった。壁高は約15～20cmを残す。住居の中央部やや北寄りに炉と思われる長径約70cm、深さ20cmの楕円形状の掘り込みを検出し、その中に焼土ブロックが多量に認められた。



第26図　5号住居址平面図

5号住居址出土遺物（第27図）

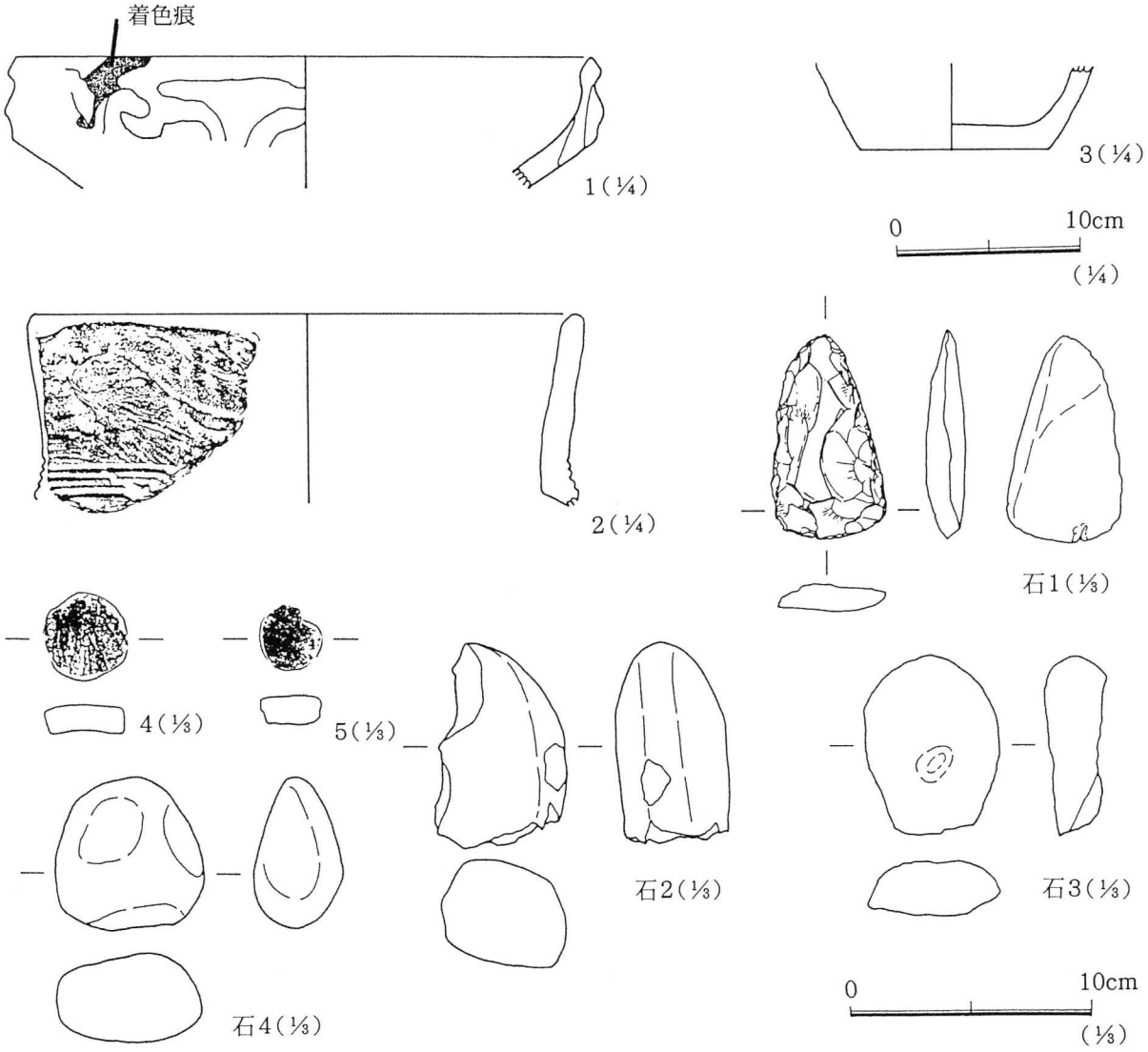
出土した遺物は、縄文時代中期の土器や石器等が中心で、実測可能なものは土器が3点、土製円板が3点、石器が4点であった。

そのうち、土器では、深鉢または浅鉢の口縁部（1・2）2点と底部（3）1点があり、土製円板（4・5）は2点出土し、直径が2.5cmと3.5cmの大きさで、表面はいずれも無文であった。（土器と土製円板の詳細は表5を参照）

石器の内容は、石斧が1点、磨石が3点であった。石斧（1）の石材は粘板岩質である。磨石（2～4）の石材は2が砂岩質、3・4が安山岩質である。

〈表５〉　５号住居址出土遺物観察表（土器類）

番号	器　種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴、備考
1	浅鉢	口径（32.0）	口縁部	①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	隆帯による文様を付す。一部赤色の着色痕あり。
2	深鉢		口縁部破片	①淡褐色～明褐色 ②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	口縁部縄文を施し、頸部に5本の平行沈線を巡らす。
3	深鉢		底部	①淡褐色　②良好 ③粗砂粒	無文。
4	土製円板	直径　3.5 厚さ　1.0		①暗褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	無文。
5	土製円板	直径　2.5 厚さ　1.1		①明褐色　②良好 ③粗砂粒	無文。



第27図　５号住居址出土遺物

2．土　坑

本調査区からは土坑が２基検出された。

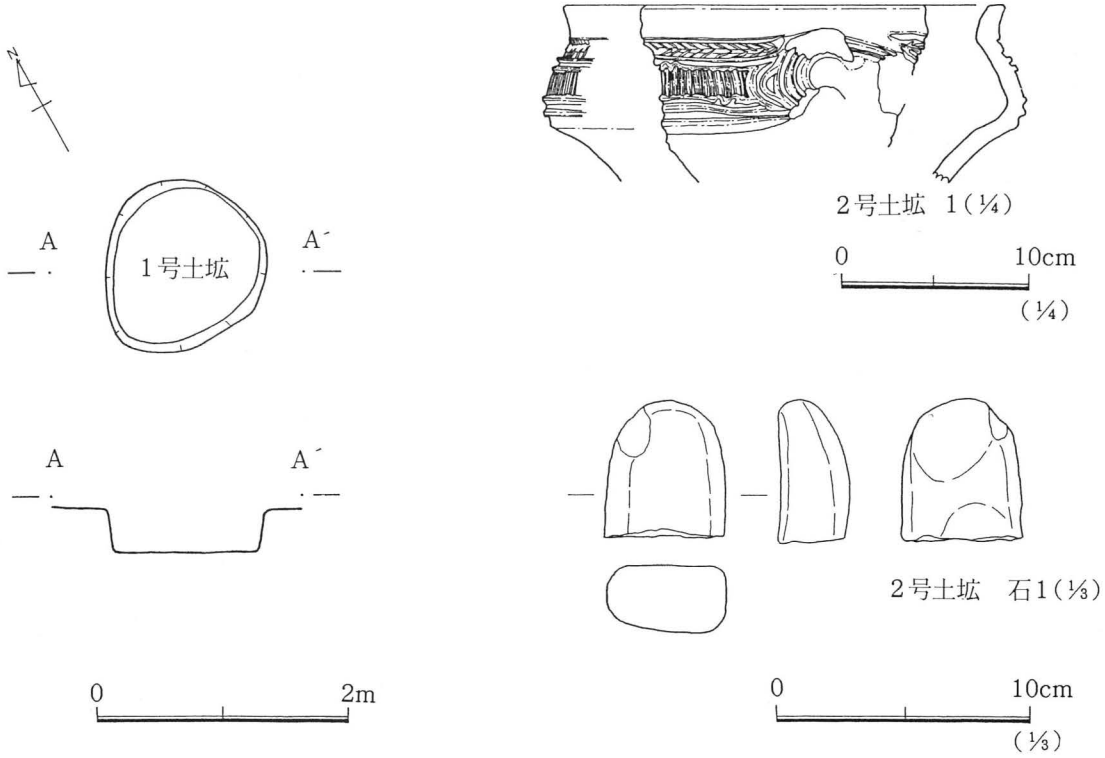
このうち、１号土坑は２号住居址のすぐ北東に隣接し、長径が約1.4mの楕円形をし、深さ約34cmを計る。遺物の出土は見られなかった。（第28図）

また、２号土坑は１号住居址のすぐ北に隣接し、長径が約1.8mの楕円形をし、深さ約19cmを計る。２号土坑から縄文時代中期の土器や石器が出土し、実測可能なものは土器が１点、石器が１点であった。

このうち、土器（1）は深鉢の口縁部で、石器（1）は敲石で石材は砂岩質であった。（第28図）
（土器の詳細は表６を参照）

〈表６〉　土坑出土遺物観察表（土器類）

番号	器　種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口径　23.3	口縁部 ～胴部	①褐色　②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	隆帯による渦巻文を付し、連続して隆帯の平行区画文を配し、その間に箆状工具による刺突文と縦位の沈線を施す。	２号土拡



第28図　　１号土坑遺構図ならびに２号土拡出土遺物

3．遺構外出土遺物

調査区域内からは、遺構に伴わず出土した遺物も多数あり、実測可能なものは土器が5点、土製円板が1点、石器が14点であった。（第29～30図）

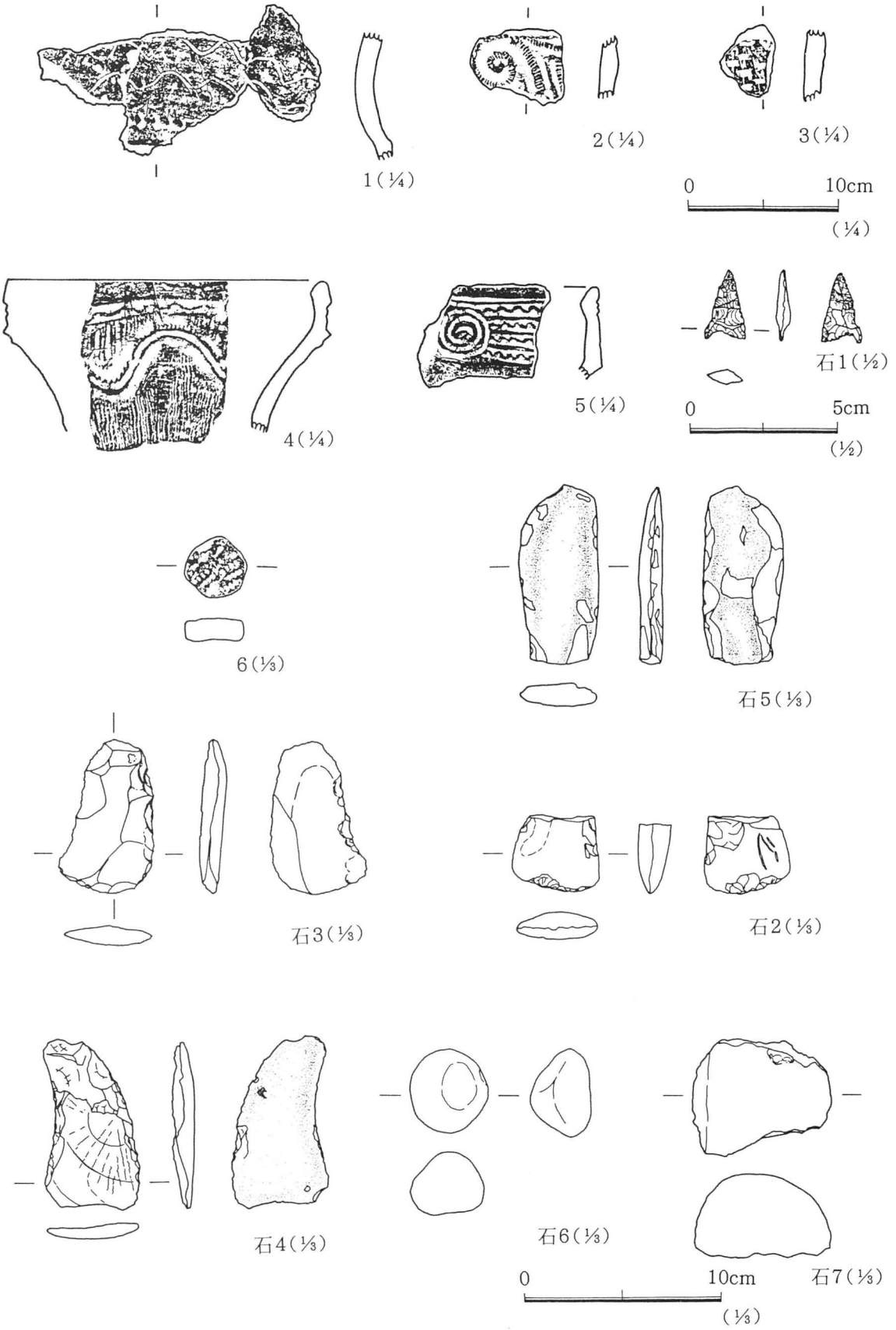
そのうち、胴部の一部が残されている深鉢（1・2）が2点で、その他は深鉢の底部（3）1点、深鉢の口縁部（4・5）2点であった。土製円板（6）は1点出土し、直径が3.1cmの大きさで、表面に縄文が施されていた。（土器と土製円板の詳細は表7を参照）

石器の内容は、石鏃が1点、石斧が4点、磨石が5点、敲石など使用痕が認められた石器が3点、砥石が1点であった。石鏃（1）の石材はチャートである。石斧（2～5）の石材は2・4が砂岩質、3が凝灰岩質、チャート、5が粘板岩質である。磨石（6～10）の石材はいずれも砂岩質であった。

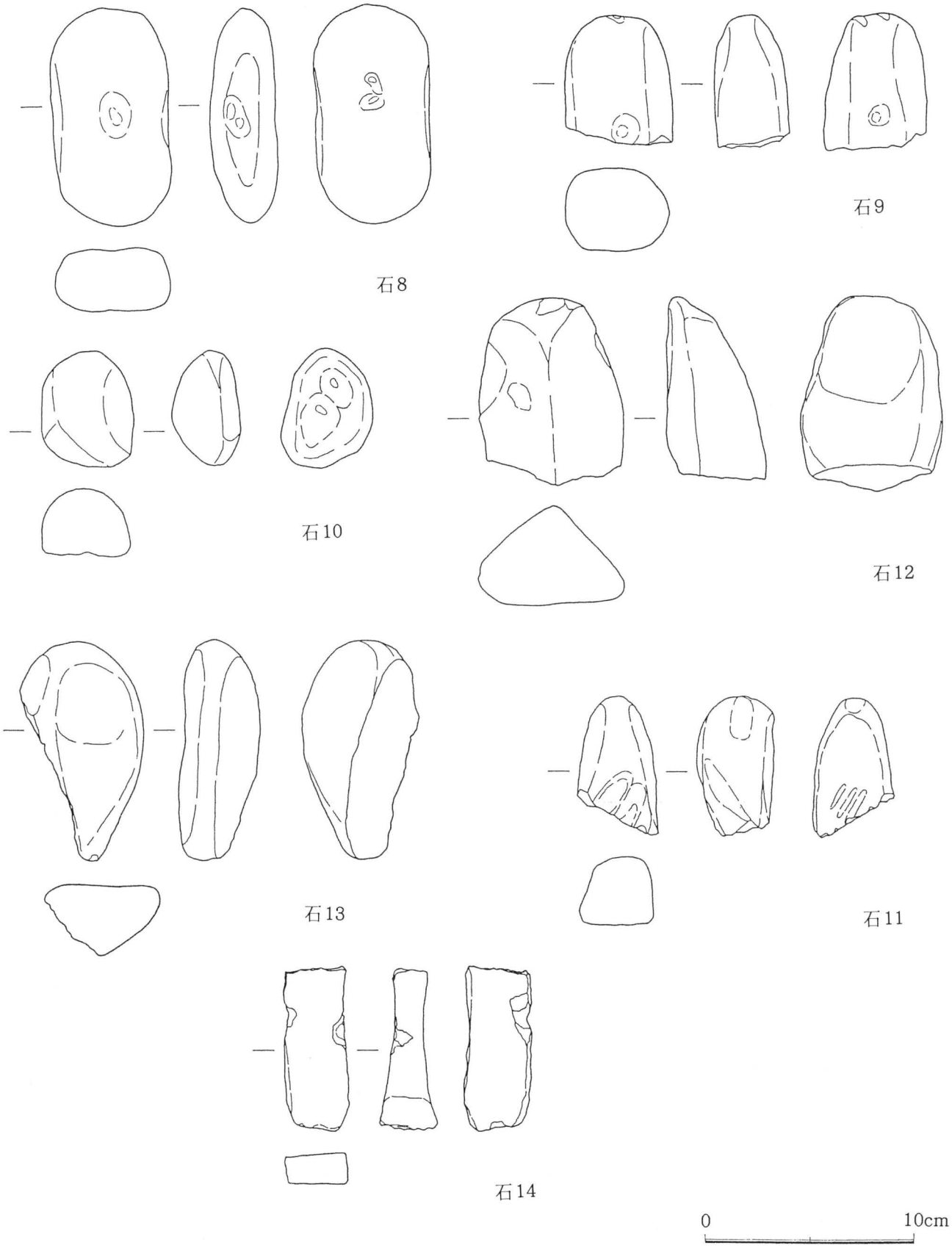
敲石などの使用痕のある石器（11～13）の石材は11・13は凝灰岩質、12は砂岩質であった。砥石（14）の石材は凝灰岩質である。1トレンチから出土した石器は1・2・6・8・14の5点で、2トレンチから出土した石器は、3・4・7・10・12・13の6点で、3トレンチから出土した石器は1のみである。5と9は表採したものである。

〈表7〉 遺構外出土遺物観察表（土器類）

番号	器 種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴	備考
1	深鉢		胴部破片	①淡褐色 ②良好	2本の沈線による波状文と、連続した半裁竹管文を巡らす。	1 T
2	深鉢		胴部破片	①明褐色 ②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	隆帯による渦巻を付し、その上に爪型文を施す。	1 T
3	深鉢		底部破片	①淡褐色 ②良好 ③粗砂粒	底部に網代痕あり。	1 T
4	深鉢	口径（21.7）	口縁部～胴部	①明褐色 ②良好 ③細砂粒・白色砂粒	2本の波状隆帯を巡らし、その上に刺突文を施す。その上位に刺突文による波状文を巡らし、その間に縦状の沈線を付す。胴部は縄文。	2 T
5	深鉢		口縁部破片	①赤褐色 ②良好 ③細砂粒	2本の平行沈線による渦巻文と、刺突文による波状文を施す。胴部は櫛掻文。	2 T
6	土製円板	直径 3.1 厚さ 1.1		①淡褐色 ②良好 ③粗砂粒・金雲母粒子	縄文あり。	3 T



第29図　遺構外出土遺物(1)



第30図　遺構外出土遺物(2)

4．その他の遺物

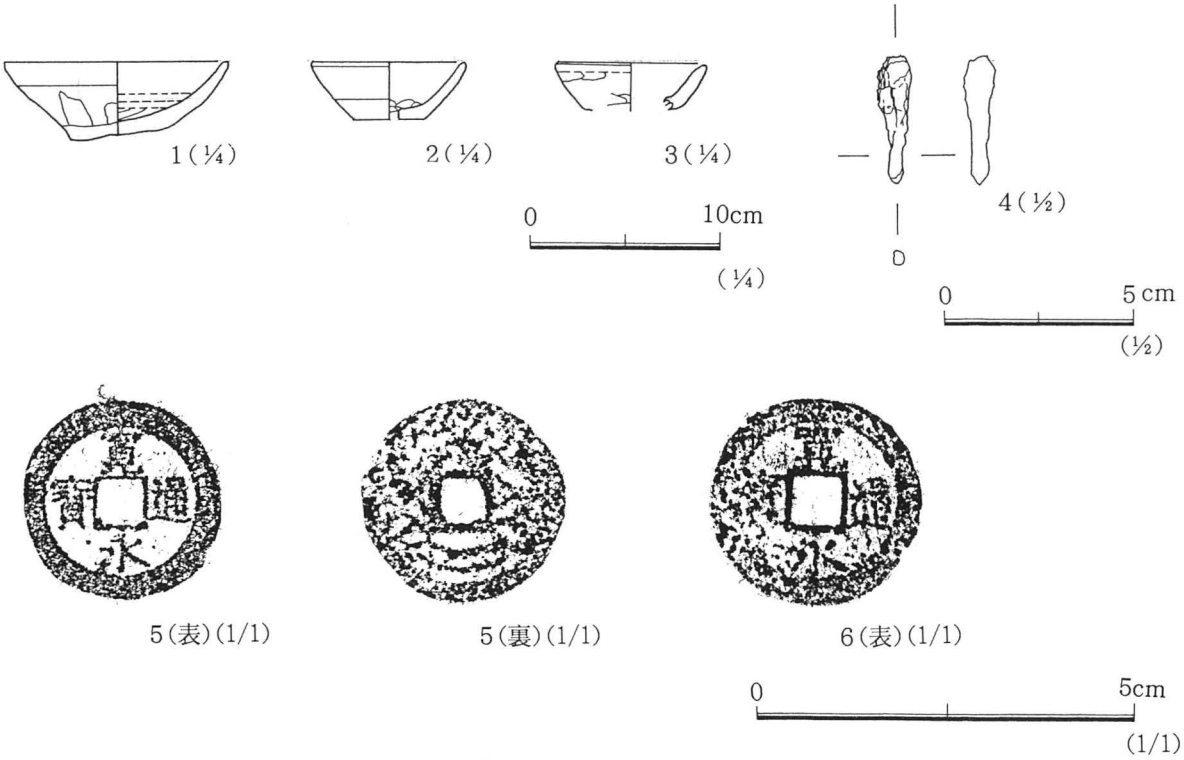
調査区域内からは、縄文時代以外の出土遺物として、土師質土器であるカワラケが3点（1～3）、鉄製品では釘が1点（4）、古銭2点（5・6）が出土している。（第31図）

これらはいずれも近世のものであり、古銭は2点とも銅銭で、内容は「寛永通寶」である。

本調査区に隣接して近世以降の墓地があるため、それに関連した遺物と考えられる。（表8参照）

〈表8〉その他の出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・文様の特徴	備考
1	カワラケ	口径 11.8 器高 4.1	ほぼ完形	①淡褐色 ②良好 ③細砂粒	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。内外面ともに体部下半に指なで調整。	1 T
2	カワラケ	口径 8.0 器高 3.1	1／2	①淡褐色 ②良好 ③細砂粒・金雲母粒子	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕と中心に穿孔あり。	1 T
3	カワラケ	口径（8.0）	底部欠損	①黒褐色 ②良好 ③細砂粒	ロクロ整形。外面に一部篦削り。	3 T
4	鉄製品（釘）	長さ（3.4）				1 T
5	古銭	直径 2.6			表面「寛永通寶」 裏面に青海波文あり。	1 T
6	古銭	直径 2.6			表面「寛永通寶」 2枚重なり。	1 T



第31図　その他の遺物

第Ⅳ章　まとめ
―加法師遺跡と館林の縄文時代の遺跡について―

本遺跡に係わる発掘調査は、平成7年度に遺跡範囲内にある館林城跡の土塁の調査をのぞくと、今回が初めての調査例となる。本調査区は、遺跡地全体（管理地）の面積に対して10％にも満たない面積であるが、5軒の住居址の検出と多量の縄文時代中期の遺物の出土を見ることができた。本遺跡は平成7年度の館林城跡土塁の調査の際にも縄文時代中期の遺物が多量に出土し、遺物の分布の密度の濃さから見ても、縄文時代の集落址の可能性が非常に高い遺跡であることが想定できたが、今回の調査によってその一部が実証されたことになる。

本調査区から検出された5軒の住居址はいずれも縄文時代中期の遺物を伴出したが、出土した遺物の量の密度は住居址によって濃淡が見られた。特に遺物の密度が高かった住居址は、2号住居址と4号住居址であった。住居の形態が把握できたのは1～4号住居址で、このうち、1・3・4号住居址はいずれも直径5m前後の楕円形をし、隣接してほぼ南北に並ぶような形で検出された。2号住居址は5軒の住居址の中で最も南に位置し、形態も5m前後の隅丸方形であり、他の住居とは異なる形態であった。これら住居址が同時期に存在したのか、あるいは前後して建てられたものかは不明である。

また、今回の調査によって把握できた特徴として、2号住居址から出土した多量の縄文土器があげられる。2号住居址からは、高さ20～30cmほどの深鉢の一括個体が12個体出土し、本市でこれまで調査した縄文時代の遺跡のうち、1軒の住居址からこれほど多量の土器を伴出した住居址はこれが初めてである。さらにこれらの土器の特徴を見ると、2号住居址から出土した土器は、南関東系の土器形式のものを中心としながらも、同時に東北系、中部・北陸系の形式を持つ土器も含まれ、各地域の特色を持つ土器が混在していることが特徴と言える。これまで、館林市内で調査された縄文時代中期の遺跡は例が少ないものの、本遺跡と同様に、南関東系の土器を中心としながらも、それ以外の形式を持つ土器が発見されることが多く、本地域が文化の交流地点であったことがうかがわれたが、今回の調査のように、同一遺構内から出土したのは初めての例である。本市周辺は、現在でも利根川・渡良瀬川の合流付近の地域であり、こうした河川を使って各地の文化がもたらされてたきたことがうかがえる。

本市において、これまで調査した縄文時代のおもな遺跡は、大袋Ⅱ遺跡（昭和55～56年度調査、縄文時代早期の炉穴・前期の住居址）、大原道東遺跡（昭和56年度調査、縄文時代後晩期）、間堀遺跡（昭和57年度調査、縄文時代前期・中期の住居址）、上ノ前遺跡（昭和59年度調査、縄文時代後晩期）があげられる。これらの遺跡のうち、大袋Ⅱ遺跡は城沼の南岸に面した台地上に位置し、大原道東遺跡・間堀遺跡・上ノ前遺跡は邑楽・館林台地の南東端部に隣接して位置する。

また、市内北西部の台地上には、高根・外和田遺跡があり、昭和46～47年度の調査の際には高さ1m前後の縄文時代中期の深鉢も出土している。

また、縄文時代中期の住居址が検出された遺跡のうち、間堀遺跡からは6軒の住居址が検出され、大きさは加法師遺跡と同様に5m前後の住居で、その形態は円形、楕円形、卵形、隅丸方形など様々な形を見ることができ、出土した土器も高さ20～30cm程度の深鉢の出土例が多く、加法師遺跡との類似点も多く見られる。

今回の調査は、加法師遺跡全体から見るとごくわずかな面積であったが、本市の中央北部に位置する縄文時代の集落の様子をうかがい知ることができたことは大きな成果といえる。

■ 参 考 文 献

館林市教育委員会　『館林市埋蔵文化財調査報告書』第1集～第33集

館林市　『館林市誌　歴史編』(1969)

群馬県教育委員会　『群馬県遺跡台帳　東毛編』(1971)

群馬県林務部　『群馬県の貴重な自然　地形・地質編』(1990)

群馬県立歴史博物館　『特別展「群馬の遺跡2－発掘最前線'97－」』(1997)

上毛新聞社　『群馬県遺跡大事典』(1999)

写真１　加法師遺跡調査区全景（手前が２号住居址）

写真２　確認調査風景

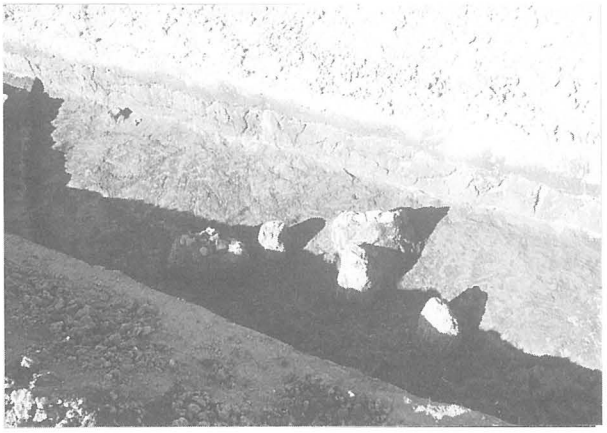


写真３　１トレンチ遺物出土状態（１号住居址）

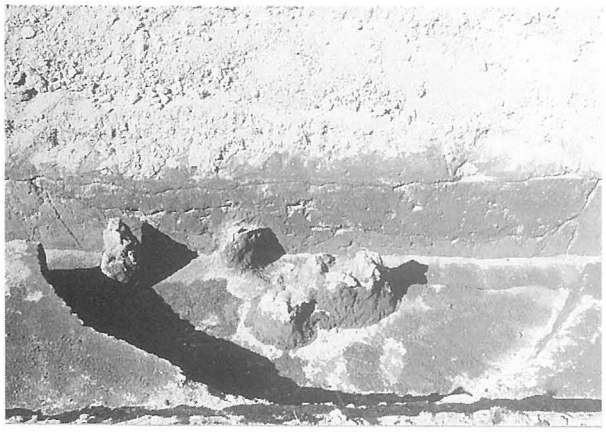


写真４　１トレンチ遺物出土状態（３号住居址）

写真５　２トレンチ遺物出土状態（２号住居址）

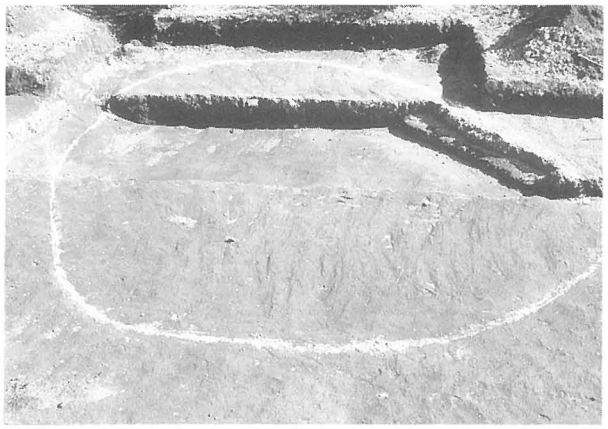


写真６　１号住居址遺構確認

写真７　１号住居址土層断面（１トレンチ）

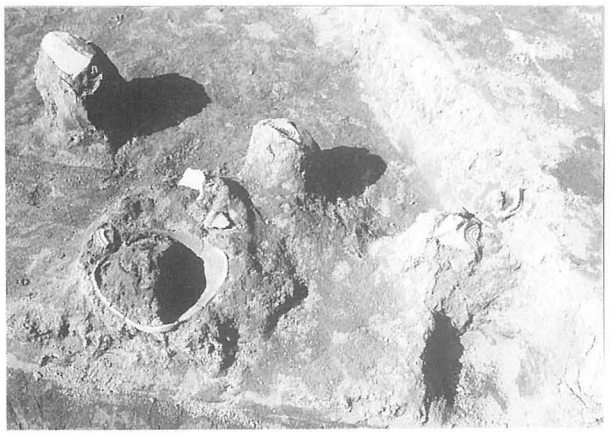


写真８　１号住居址遺物出土状態

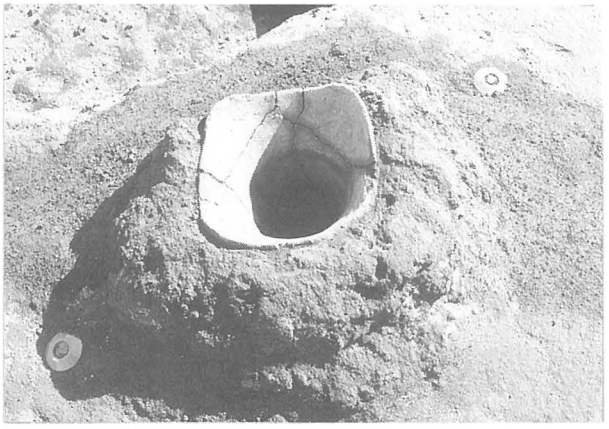


写真９　１号住居址遺物出土状態（埋甕炉）

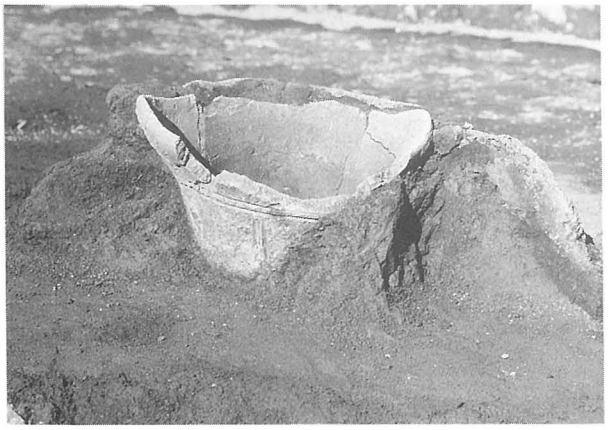


写真10　１号住居址埋甕炉埋設状態

写真11　１号住居址完掘状態

写真12　2号住居址遺構確認

写真13　2号住居址土層断面

写真14　2号住居址遺物出土状態(1)

写真15　2号住居址遺物出土状態(2)

写真16　2号住居址遺物出土状態(3)

写真17　2号住居址遺物出土状態(4)

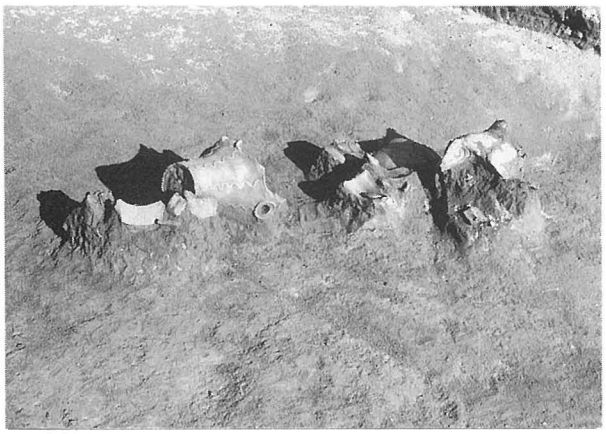


写真18　2号住居址遺物出土状態(5)

写真19　2号住居址完掘状態

写真20　3号住居址遺構確認

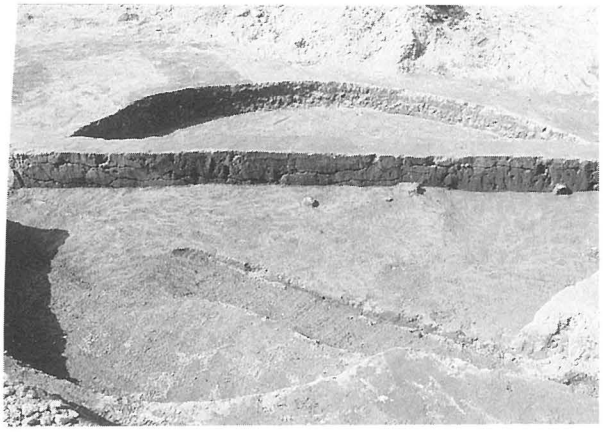


写真21　3号住居址土層断面

写真22　3号住居址遺物出土状態(1)

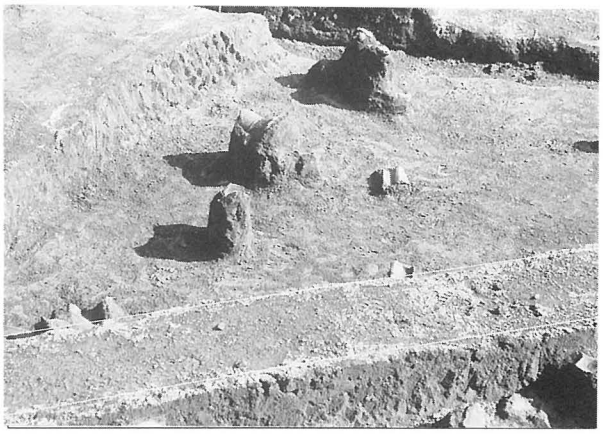


写真23　3号住居址遺物出土状態(2)

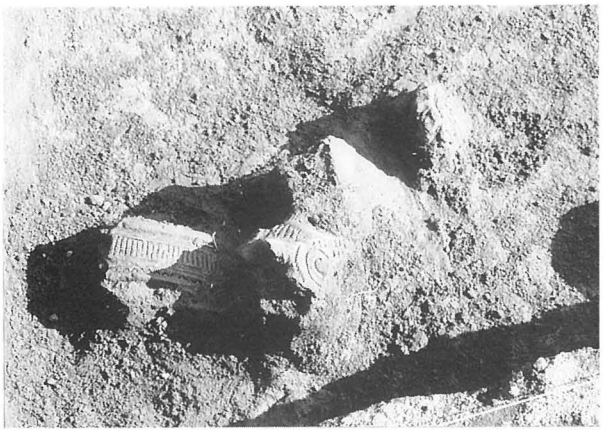


写真24　3号住居址遺物出土状態(3)

写真25　3号住居址完掘状態

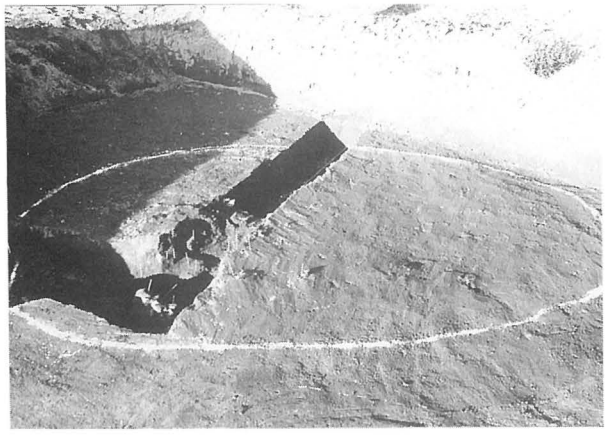


写真26　4号住居址遺構確認

写真27　4号住居址土層断面

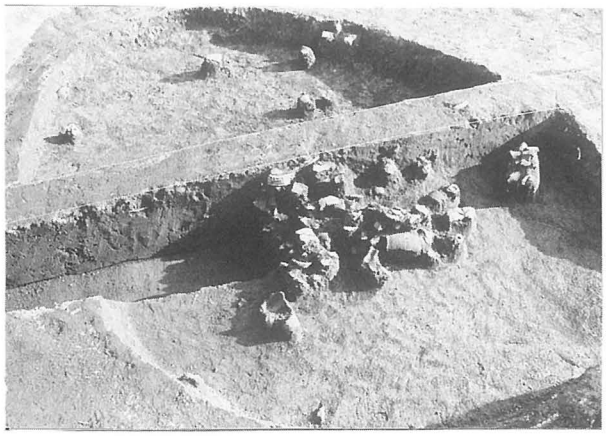


写真28　4号住居址遺物出土状態(1)

写真29　4号住居址遺物出土状態(2)

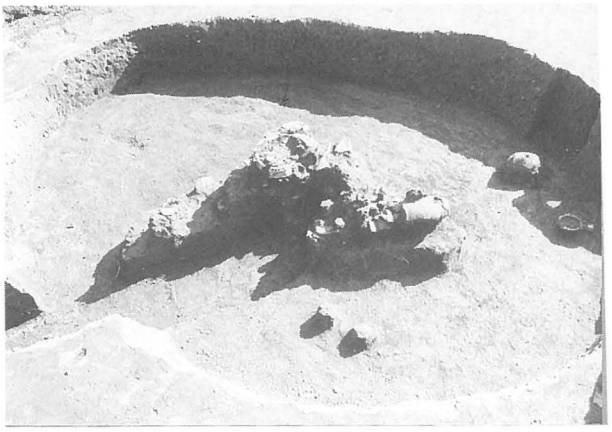


写真30　4号住居址遺物出土状態(3)

写真31　4号住居址遺物出土状態(4)

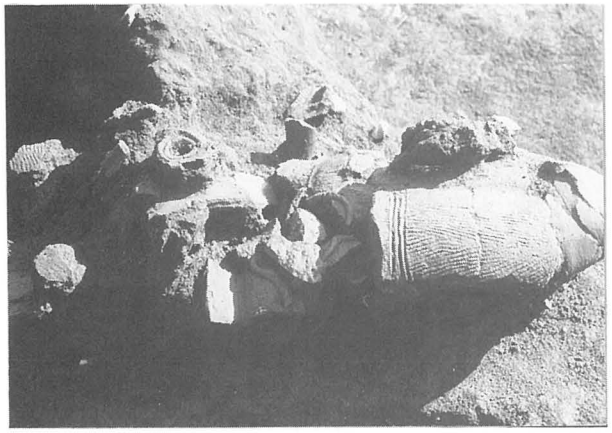


写真32　4号住居址遺物出土状態(5)

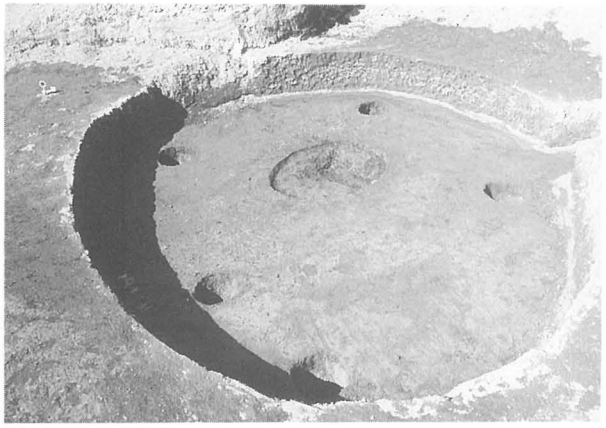


写真33　4号住居址完掘状態

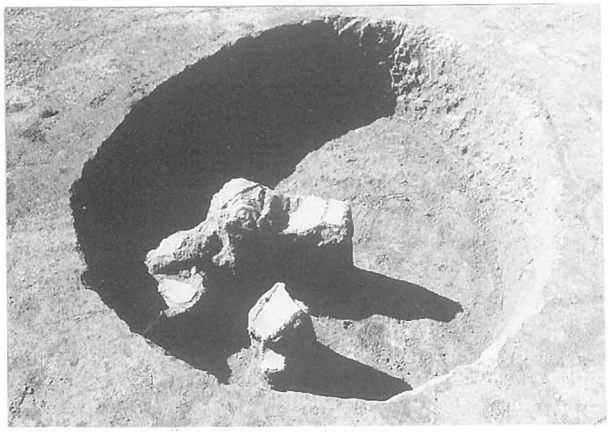


写真34　2号土拡遺物出土状態

写真35　住居址完掘状態全景（右手前が4号住居址）

写真36　1住－1

写真37　1住－2

写真38　1住－3

写真39　1住－4～10

写真40　1住－11

写真41　1住－石器1～10

写真42　1住－石器11～15

写真43　　1住ー石器16～20

写真44　　2住ー1

写真45　　2住ー2

写真46　　2住ー3

写真47　　2住ー4

写真48　2住－5

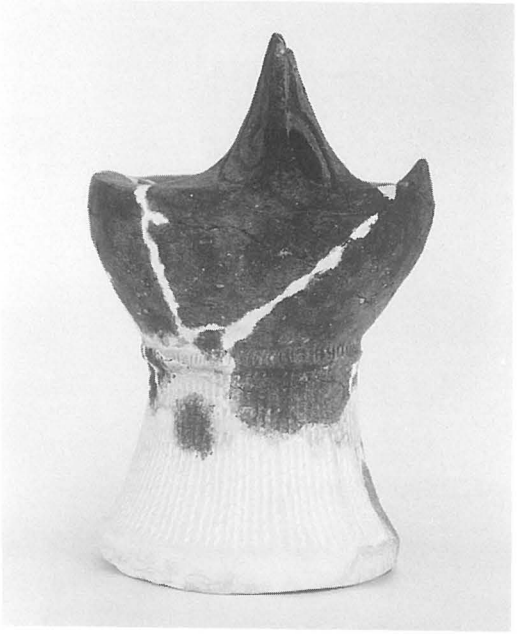


写真49　2住－6

写真50　2住－7

写真51　2住－8

写真52　2住－9

写真53　2住－10

写真54　2住－11

写真55　2住－13

写真56　2住－16

写真57　2住－15

写真58　2住－12

写真59　2住－14

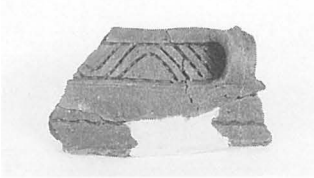


写真60　2住－17

写真61　2住－18

写真62　2住－19

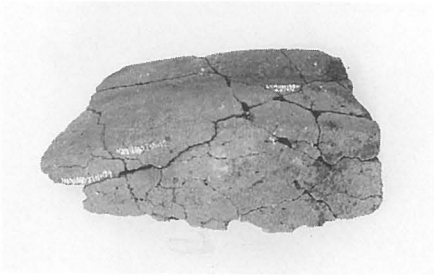


写真63　2住－20

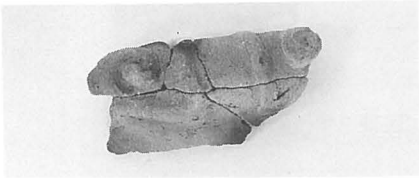


写真64　2住－21

写真65
2住－22～36

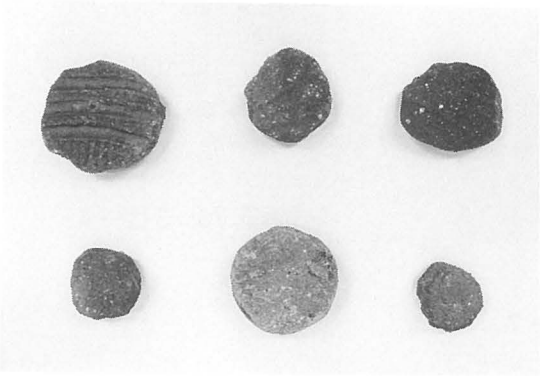


写真66　2住－37～42

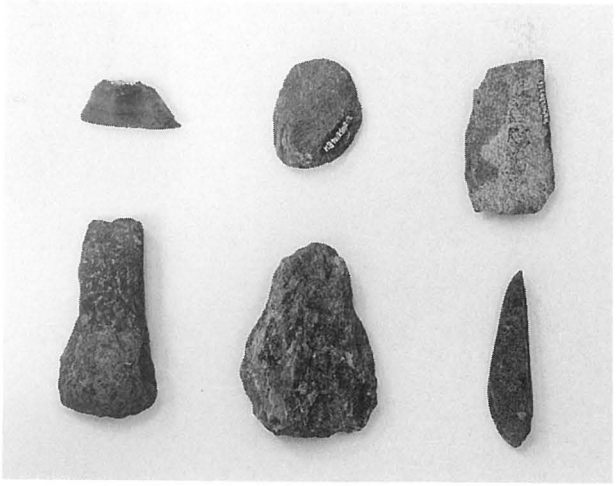


写真67　2住－石器1～6

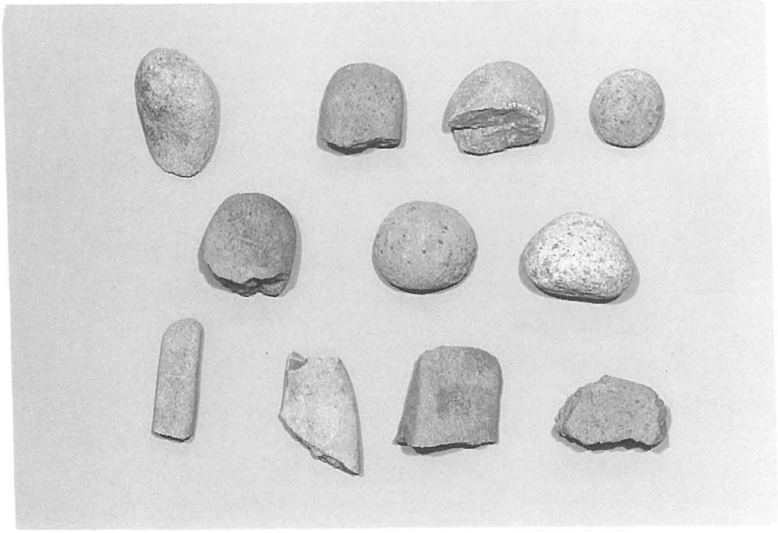


写真68
2住－石器7～17

写真69　3住－1

写真70　3住－2

写真71　3住－3

写真72　3住－7

写真73　3住－4

写真74　3住－5・6・8～10

写真75　3住－11

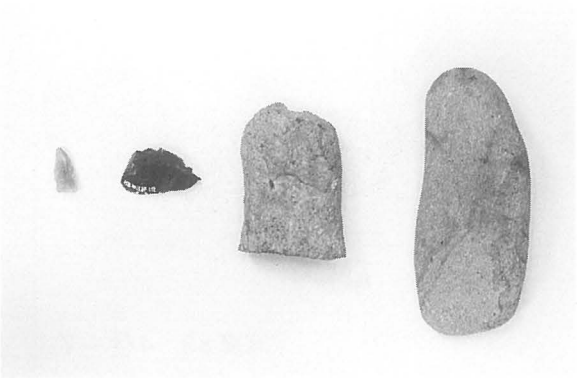


写真76　3住ー石器1～4

写真77　3住ー石器5～11

写真78　4住ー1

写真79　4住ー2

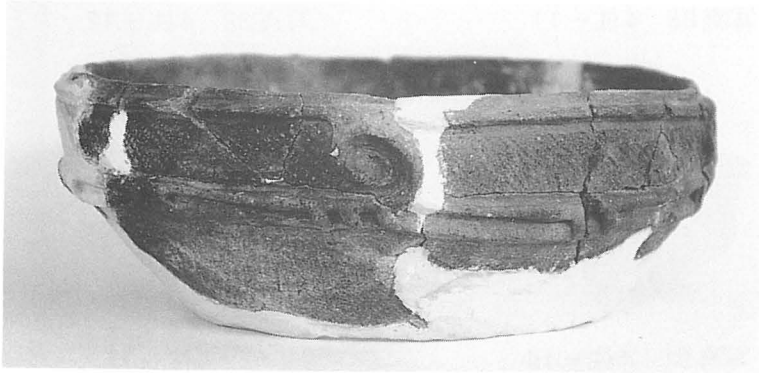


写真80　4住ー3

写真81　4住－6

写真82　4住－4

写真83　4住－7

写真84　4住－5

写真85　4住－8

写真86　4住－9

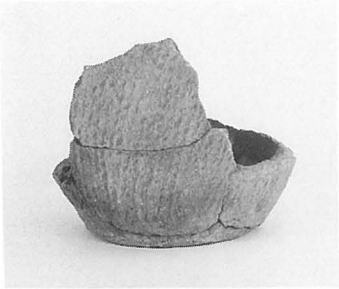


写真87　4住－10

写真88　4住－11

写真89　4住－12

写真90　4住－13

写真91　4住－14

写真92　4住－15

写真93
4住－16～27

写真94
4住－28～30

写真95
4住－石器1～8

写真96
4住ー石器9～15

写真97　5住ー1

写真98　5住ー2

写真99　5住ー3

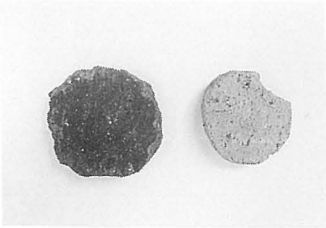


写真100　5住ー4・5

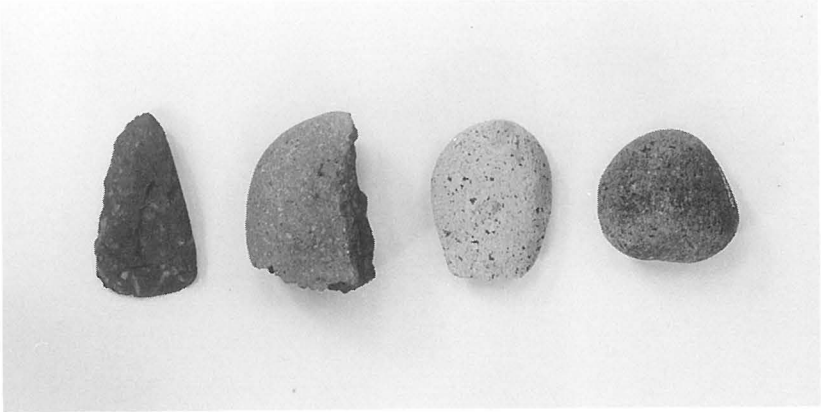


写真101　5住ー石器1～4

写真102　土坑－1

写真103　土坑－石器1

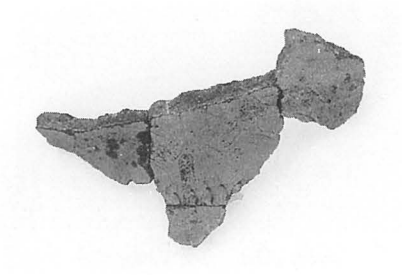


写真104　遺構外－1

写真105　遺構外－4

写真106　遺構外－2・3・5・6

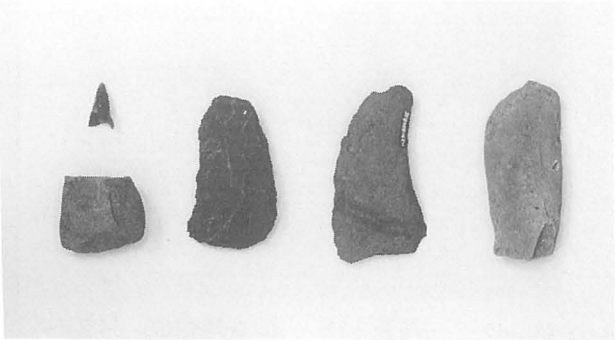


写真107
遺構外－石器1～5

写真108
遺構外－石器6～14

写真109　その他－1

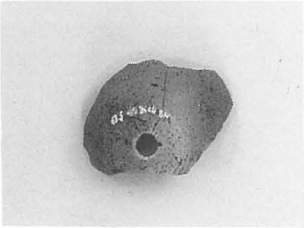


写真110　その他－2

写真111　その他－3

写真112　その他－4

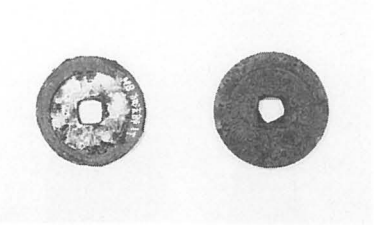


写真113　その他－5・6

写真114　調査風景(1)

写真115　調査風景(2)

写真116　調査風景(3)

写真117　調査風景(4)

抄　録

ふりがな	かぼうしいせき
書　名	加法師遺跡
副書名	――
巻　次	――
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第34集
編集者名	岡屋紀子
編集機関	館林市教育委員会
所在地	〒374－0018　群馬県館林市城町1－1
発行年月日	西暦　1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かぼうし 加法師	かぼうしちょう 加法師町	1207	39	－	－	1997 1997	217	墓地

遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加法師	集落址	縄文時代	住居址　5軒 土坑　2基	縄文時代中期の土器・石器	

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第34集

か　ぼう　し　い　せき

加　法　師　遺　跡

発　　行　　館林市教育委員会文化振興課

〒374－0018　群馬県館林市城町3－1

TEL　0276－74－4111

印　刷　所　　㈱小林印刷所

発行年月日　　平成11年3月31日

文化財愛護シンボルマーク
故郷の文化と歴史をみなおそう